広畑遺跡

—長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書—

1989

御代田町教育委員会

広畑遺跡

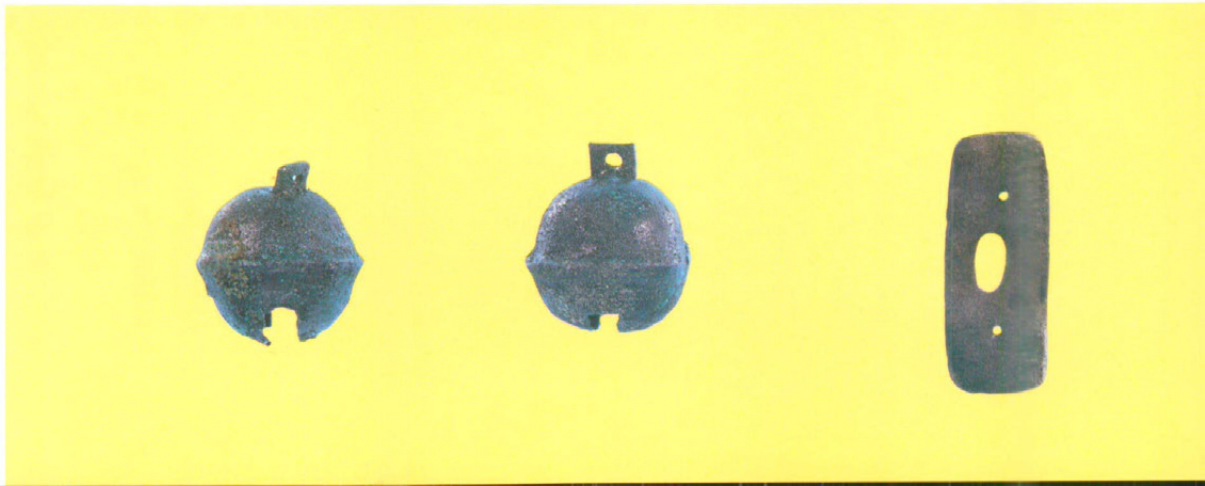
—長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書—

1989

御代田町教育委員会

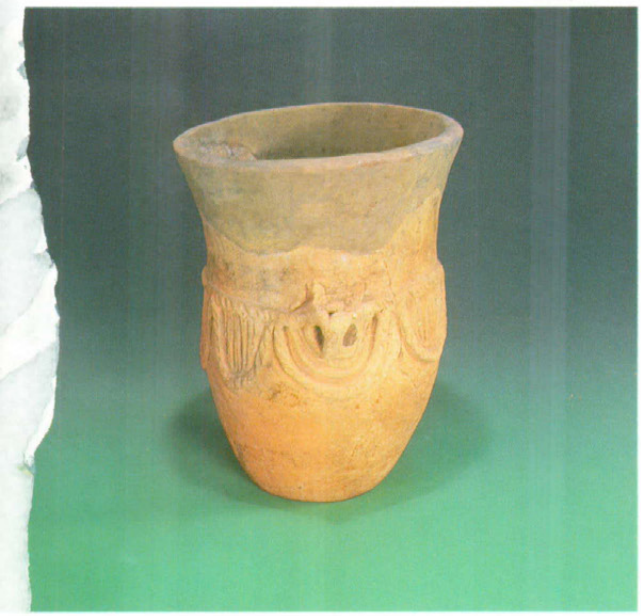
▷広畑遺跡の航空写真（北方より）

▷平安時代の土器（H－1号住居址）



▷平安時代の銅製品（H－1号住居址）

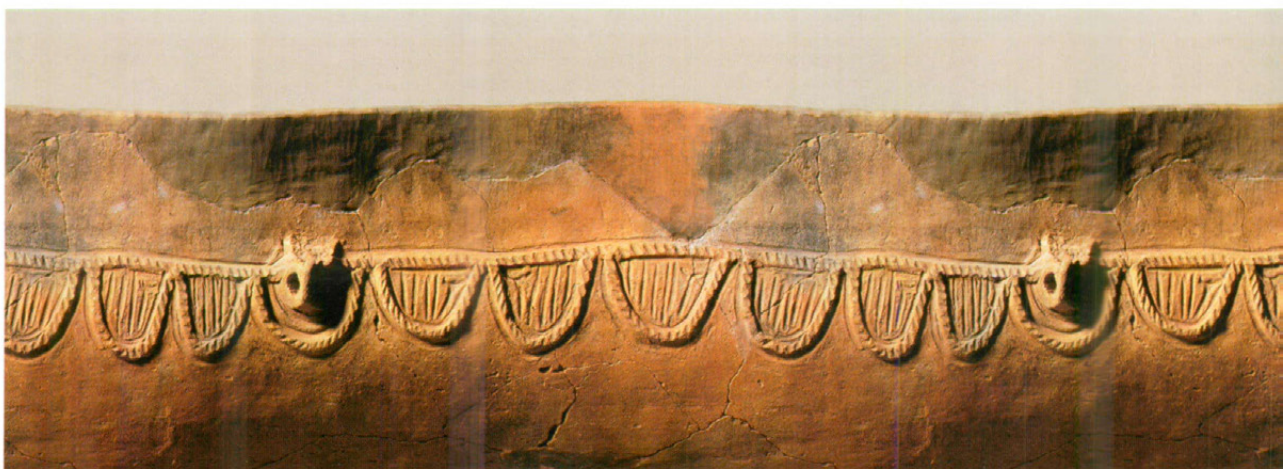
▷U―1号埋甕



△内堀高治氏所蔵の土器

△内堀典浩氏寄贈の土器

▽内堀高治氏所蔵土器の展開写真　（小川忠博氏撮影）



序

ここ東信地方においては、近代農業における流通化がクローズアップされるなかで、浅間山麓広域営農団地農道整備事業が計画されてまいりました。

その通称「広域農道」のルートは、上田市―軽井沢町間ですが、昭和60年には上田市―東部町間の開通をみました。そして残りの東部町―小諸市―御代田町―軽井沢町間の早期開通を待つのみとなりました。

しかし、「広域農道」の御代田町分のルートについては埋蔵文化財包蔵地５カ所が周知されており、農道工事の実施にあたってはその５遺跡の破壊が余儀なくされました。このため、これらの遺跡については、緊急に発掘調査を実施して記録保存を図ることとなりました。これを受けて昭和62年に発掘調査が実施されたのが本広畑遺跡で、翌年度も含めた二年度継続事業となりました。

広畑遺跡は、古代の御牧である「塩野牧」内にも位置しているといわれていますが、本調査では往時の住居跡の検出をみることができ、一定の成果を得ることができました。

最後に、本調査に実際にあたられました皆様をはじめとして、関係各位に深甚なる謝意を表し、序とさせていただきます。

平成元年　三月

御代田町教育委員会

例　言

1　本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の広畑(ひろはた)遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、上小地方事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。

3　本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。

4　本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

◎　遺　物　復　原　　伴野有希子、小山内玲子。

◎　遺　物　実　測　　鳥居　亮、小山内玲子、㈱パスコ。

◎　遺　物　拓　本　　伴野有希子、小山内玲子。

◎　遺物トレース　　小山内玲子(土師器)、鳥居　亮(鉄器)、堤　　隆(縄文土器・石器)。

◎　遺構トレース　　小山内玲子。

◎　遺　構　写　真　　堤　　隆、鳥居　亮。

◎　遺　物　写　真　　鳥居　亮。

◎　遺物観察表作成　　堤　　隆。

◎　版　　組　　み　　小山内玲子、鳥居　亮、堤　　隆、伴野有希子。

5　本書に使用した航空写真は、新日本航業㈱が撮影したものである。

6　本書の本文編は、第Ⅳ章5を本橋恵美子が、それ以外は、堤　　隆、が執筆した。

7　本書の付編については以下の各位より玉稿を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

◎　付編1　京都産業大学　　山田　治　先生

◎　付編2　㈱　パリノサーヴェイ

8　本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、堤　　隆、が行なった。

9　本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配意を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。(順不同・敬称略)

梅村弘、田中正二郎、笹沢浩、戸沢充則、西山克己、桐原健、松村恵司、山口英男、宮下健司、川島雅人、林原利明、諏訪間順、諏訪間伸、樫田誠、保坂康夫、新田浩三、林幸彦、羽毛田卓也、高村博文、小山岳夫、三石宗一、郷道哲章、福島邦男、村沢正弘、丸山敞一郎、大上周三、山下誠一、花岡弘、石上周蔵、小平和夫、近藤尚義、岩崎直也、中田英、臼田武正、寺島俊郎、木内捷、原明芳、織笠昭、伊丹徹、斎藤孝正、宮崎憲二、児玉卓文、百瀬長秀、河野喜映、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、竹原学、萩原三雄、河西学、平野修。

また、本遺跡出土の鉄器については、㈶山梨文化財研究所および同研究所鈴木稔氏に保存処理を実施していただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

凡　例

1　遺構の名称

H　→　竪穴住居址　　D　→　土壙　　M　→　溝状遺構

2　遺構のナンバーは、時代別・時期別になっておらず、ランダムである。

3　挿図の縮尺

竪穴住居址＝1：80、カマド＝1：40、土壙＝1：60、溝状遺構＝1：100、1：200、土器＝1：4、金属器4：5、1：3

以上が基本的なものである。これ以外のものも含めて挿図中にその縮尺を明示してある。

4　図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、土器が1：3、これ以外の遺物については挿図の縮尺と同一にしてある。

顕微鏡写真については、その縮尺を明示してある。

5　遺構面積の計測にはプラニメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

6　出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、一は不明、（　）は推定値、〈　〉は大幅な推定値を示す。単位はcmである。

7　出土遺物一覧表〈鉄器・石器〉の法量は、一は不明、（　）は現存値、（　）がない場合は完存値を表す。単位は、cm・gである。

8　遺構の層序説明は本文中に記した。

9　土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

10　挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。

(1)遺構

遺構断面＝斜線　ただし、切り合いによる破壊部分は斜線を逆方向にした。

カマド＝網点（太）　火床＝網点（細）

(2)遺物

土器断面　須恵器断面＝網点（太）　灰釉陶器断面＝網点（細）

土器内外面　黒色処理＝網点（太）　赤色塗彩＝網点（細）　灰釉範囲＝斑点

石器外面　砥石研砥面範囲・石器使用痕範囲＝網点（太）

本 文 目 次

序　文

例　言

凡　例

目　次

I　発掘調査の概要……（堤　　隆）1

1　調査に至る動機……1

2　発掘調査の概要……2

3　検出された遺構……2

II　遺跡の環境……5

1　自然環境……5

2　歴史的環境……5

III　層　　序……8

IV　遺構と遺物……9

1　竪穴住居址……9

(1)　H－1号住居址……9

2　土　壙……16

(1)　D－1号土壙……16
(2)　D－2号土壙……16
(3)　D－3号土壙……17
(4)　D－4号土壙……17
(5)　D－5号土壙……17
(6)　D－6号土壙……18
(7)　D－7号土壙……18
(8)　D－8号土壙……19
(9)　D－9号土壙……19
(10)　D－10号土壙……19
(11)　D－11号土壙……20
(12)　D－12号土壙……20
(13)　D－13号土壙……20
(14)　D－14号土壙……21
(15)　D－15号土壙……22
(16)　D－16号土壙……22
(17)　D－17号土壙……22
(18)　D－18号土壙……23
(19)　D－19号土壙……23
(20)　D－20号土壙……24
(21)　D－21号土壙……24

3　溝状遺構……24

(1)　M－1号溝状遺構……24
(2)　M－2号溝状遺構……24

(3) M－3号溝状遺構……25　(4) M－4号溝状遺構……25
4 埋　甕……25
(1) U－1号埋甕……25
5 遺　物……(本橋恵美子)26
(1) U－1号埋甕の土器……26
(2) 既出遺物……26
(3) 土壙等出土遺物……29
V 総　括……(堤　隆)33
付 編 1 液体シンチレーション^{14}C年代測定……(山田　治)34
付 編 2 広畑遺跡出土炭化材の樹種同定……(パリノ・サーヴェイ㈱)㈱)35
(1) 試　料……35　(3) 結　果……35
(2) 方　法……35　(4) 考　察……38

挿図目次

第1図 広畑遺跡付近と調査対象区……1
第2図 広畑遺跡遺構全体図……3・4
第3図 広畑遺跡（5）と周辺の遺跡分布……7
第4図 広畑遺跡の基本層序……8
第5図 H－1号住居址実測図……9
第6図 H－1号住居址遺物及炭化材の分布……10
第7図 H－1号住居址カマド実測図……11
第8図 H－1号住居址出土遺物……12
第9図 H－1号住居址出土遺物……13
第10図 H－1号住居址出土遺物……15
第11図 D－1・D－2号土壙実測図……16
第12図 D－3・D－4号土壙実測図……17
第13図 D－5～D－7号土壙実測図……18
第14図 D－8～D－11号土壙実測図……19
第15図 D－12・D－13号土壙実測図……20
第16図 D－14～D－16号土壙実測図……21
第17図 D－17・D－18号土壙実測図……22
第18図 D－19～D－21号土壙実測図……23
第19図 H－1号溝状遺構……24
第20図 溝状遺構実測図……25
第21図 U－1号埋甕実測図……26
第22図 広畑遺跡出土土器……27
第23図 広畑遺跡出土石器……29
第24図 広畑遺跡出土石器……30
第25図 広畑遺跡出土遺物……31
付 編
第1図 同定炭化材の分布……39
第2図 H－1号住居址炭化材の顕微鏡写真……39
第3図 H－1号住居址炭化材の顕微鏡写真……40

付表目次

第1表 周辺遺跡一覧表……6
第2表 H－1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉……14
第3表 H－1号住居址出土遺物一覧表〈銅製品・鉄製品〉……14

第4表　遺物一覧表〈土器〉……28
第5表　遺物一覧表〈石器〉……29
第6表　土壙出土遺物一覧表〈土器〉……32
付　編
第1表　広畑遺跡H－1号住居址出土炭化材の樹種……37

図　版　目　次

巻頭図版　一
巻頭図版　二

図版　1　広畑遺跡の航空写真
図版　2　H－1号住居址
図版　3　H－1号住居址
図版　4　土壙
図版　5　土壙
図版　6　土壙
図版　7　土壙・埋甕
図版　8　溝状遺構
図版　9　H－1号住居址出土遺物
図版　10　縄文土器
図版　11　縄文土器の展開写真
図版　12　縄文土器
図版　13　縄文土器・石器

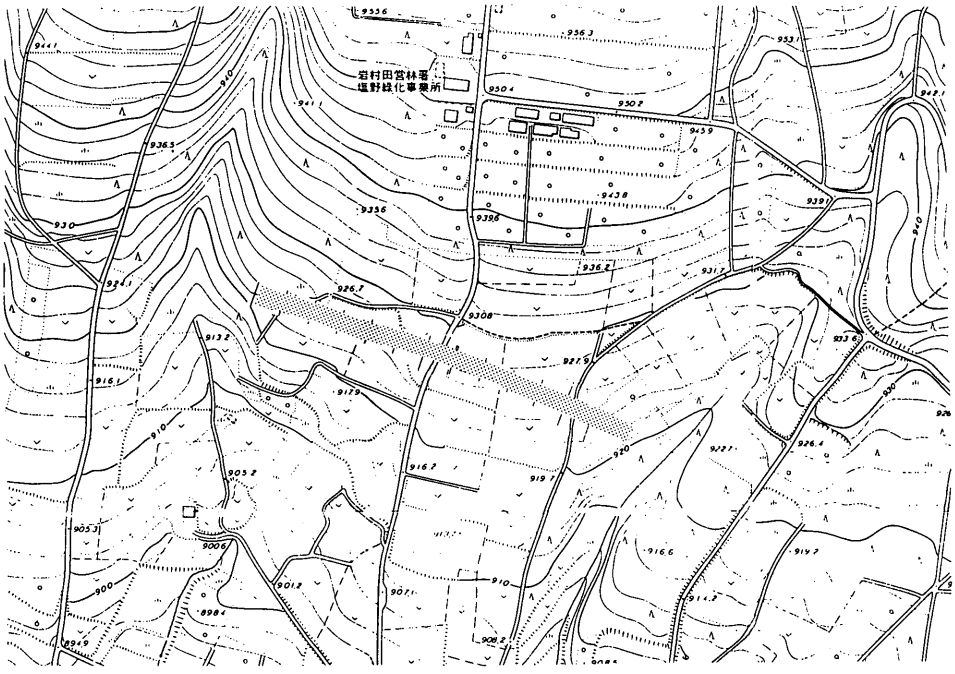
Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る動機

近代農業における流通化がクローズアップされるなかで、浅間山麓広域営農団地農道整備事業が計画された。その通称「広域農道」のルートは、上田一軽井沢町間であるが、昭和60年には上田市一東部町間の開通をみ、残りの東部町一小諸市一御代田町一軽井沢町間の開通を待つのみとなった。

「広域農道」の御代田町分のルートについては、埋蔵文化財包蔵地５カ所が周知されており、農道工事の実施にあたってはその５遺跡の破壊が余儀なくされた。このため農道工事の原因者である旧東信土地改良事務所（現上小地方事務所）と長野県教育委員会文化課および御代田町教育委員会の三者において協議がなされ、これらの遺跡について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

これを受けて昭和60年度に大沼遺跡の発掘調査が実施された。つづいて昭和62年に発掘調査が実施されたのが本広畑遺跡であり、昭和62年度・昭和63年度の二年度継続事業となった。



第１図　広畑遺跡付近と調査対象区（１：5,000）

2　発掘調査の概要

1　遺跡名　広畑（ひろはた）遺跡

2　所在地　長野県北佐久郡御代田町大字塩野字広畑

3　発掘期間　昭和62年７月１日　～　昭和62年７月31日　（昭和62年度）

4　整理期間　昭和62年８月２日　～　昭和63年３月31日　（昭和62年度）

昭和63年７月１日　～　平成元年３月25日　（昭和63年度）

5　発掘理由　浅間山麓広域営農団地農道整備事業に伴い、広畑遺跡の破壊が予想されるため緊急発掘調査を実施し記録保存を行なう。

6　費用負担　調査費用全額を原因者である上小地方事務所が負担する。

8　事務局　◎　教育次長　桜井定巳、山本岩正　◎　社会・同和教育係長　萩原茂

◎　社会・同和教育係　内堀篤志、堤　隆

9　調査団

顧　問　古越顕助（御代田町長）、故小林正人（前教育長）

参　与　桜井為吉、田村泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、尾台卓一、大井源寿、内堀達人（御代田町文化財審議委員）

団　長　由井茂也（佐久考古学会会長）

副団長　山本宣夫（御代田町文化財審議委員長）

担当者　堤　隆（御代田町教育委員会）

調査員　鳥居　亮（主任）

補助員　伴野有希子

協力者　小山内玲子、角張憲子、茂木勝等、高山玲子、高地正雄、田村祐子、古越敏彦、熊田すみ子、桝形カズヨ、古川まち子、山本まさる、大井吉次郎、飯田すえの、重田文枝、大井さゆり、甘利隆志、今井吉郎、鈴木五郎、佐々木史子、碓井勝子、桜井和人、松本友子、尾沼けさと、森川宗治、尾沼大作、柳沢純子

3　検出された遺構

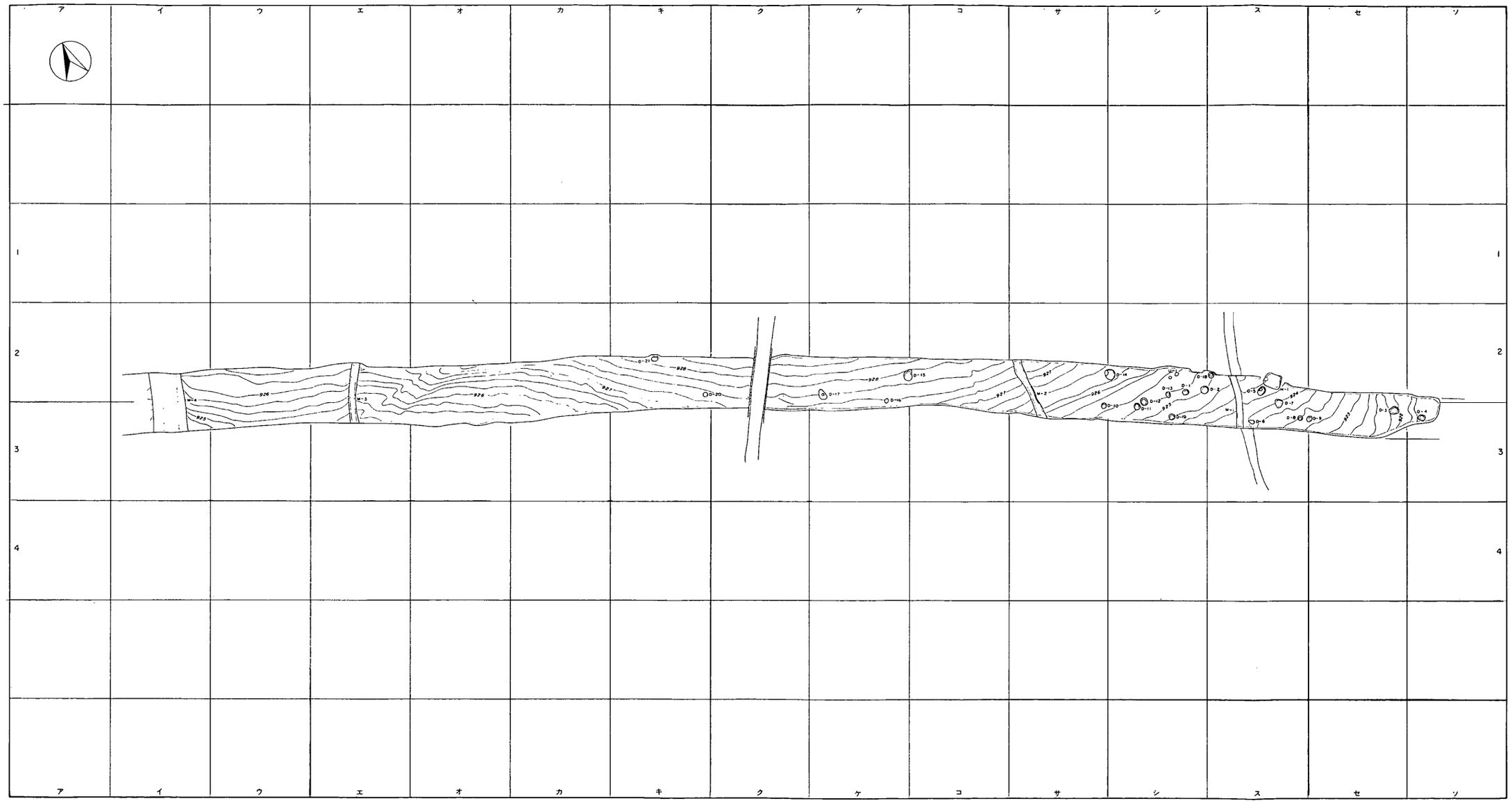
広畑遺跡において検出された遺構は、全体図第２図と以下に示すとおりである。

◎　竪穴住居址　……　１軒

◎　土　　壙　……　21基

◎　溝状遺構　……　４基

◎　埋　　甕　……　１基



第２図　広畑遺跡遺構全体図（１：１,000）

II　遺跡の環境

1　自然環境

広畑遺跡の背景には、標高2,560mを測る浅間山が聳えている。浅間山は、現在も盛んに活動を続けている活火山で、おおよそ数万年前に活動が開始されたといわれている。その活動期は、古い順から、黒斑山期（数万～1.6万年前頃）→仏岩期（1.5万年前頃）→軽石流期（1.4～1.1万年前頃）→前掛山期（数千年前～）とたどることができる。

広畑遺跡の基盤層は、これらの時期の浅間山麓の噴出物からなり、緩やかな傾斜面を形成している。その両脇は沢となり、馬背状の地形の頂点に遺跡が存在している。ちなみに遺跡の基盤層のうちVI層は軽石流期の第２軽石流（約１万１千年前）である。

広畑遺跡は、標高920m前後を測るが、その標高800～900mのラインは浅間山麓からの伏流水が地表に湧出する地帯となっており、付近には多くの湧水が認められる。著名な真楽寺『大沼の池』をたたえる豊富な水も、この地帯に湧き出る湧水のひとつである。また、広畑遺跡の発掘地点の東脇の沢からも豊富な湧水が認められ、広畑遺跡に居住した原始・古代の人々が利用したであろうことを容易に推測させる。しかし残念ながら、この湧水も広域農道工事によって息を封じられてしまった。

遺跡付近の森林は、現在は植林されたカラマツ林が主になっているが、人の手の入らない原植生とは、コナラ類等の卓抜する落葉広葉樹林であったものと考えられる。後述するが、本遺跡の平安時代H－１号住居址に使用されていた材は、コナラ属が主で、他にクリ・カツラ・オニグルミ等であった。むろん住居使用材には選択の偏りが想定されるが、これらが当時の付近の植生一部を反映していることもまた事実であろう。

2　歴史的環境

前述した標高800～900mの湧水ラインは、縄文時代中期から後期にかけての遺跡が集中する地帯である（第３図、第１表）。広畑遺跡の西南、小諸市との行政堺付近には、縄文時代中・後期の西荒神、東荒神、西城西、西城東遺跡などが存在している。

名刹真楽寺の裏手には、同じく広域農道整備に伴って昭和60年度に発掘調査がなされた大沼遺跡（１）が存在している。大沼遺跡においては、縄文中期後半の遺物包含層が確認されるのみにとどまった。大沼遺跡の南には、縄文早期の楕円押型文土器三片を出土した滝沢遺跡（２）が存

在する。また、本遺跡の東には城の腰遺跡（3）、細尾根遺跡（4）、狸窪遺跡（6）がある。これらの遺跡では、縄文中・後期の遺物のほか、古墳・奈良平安時代の遺物が採集される場合もある。第3図7は西駒込遺跡、9は東二ツ石遺跡で、ともに広域農道予定路線にあたっており、平成元年度調査予定である。

縄文時代に続く、弥生時代の良好な遺跡はこの付近では認められていない。初期の稲作文化にあっては、この地域の冷涼な気候が耕作に不適切であったのであろう。

古墳時代では、本遺跡の南方1～2kmのあたりに終末期の群集墳が形成されている。

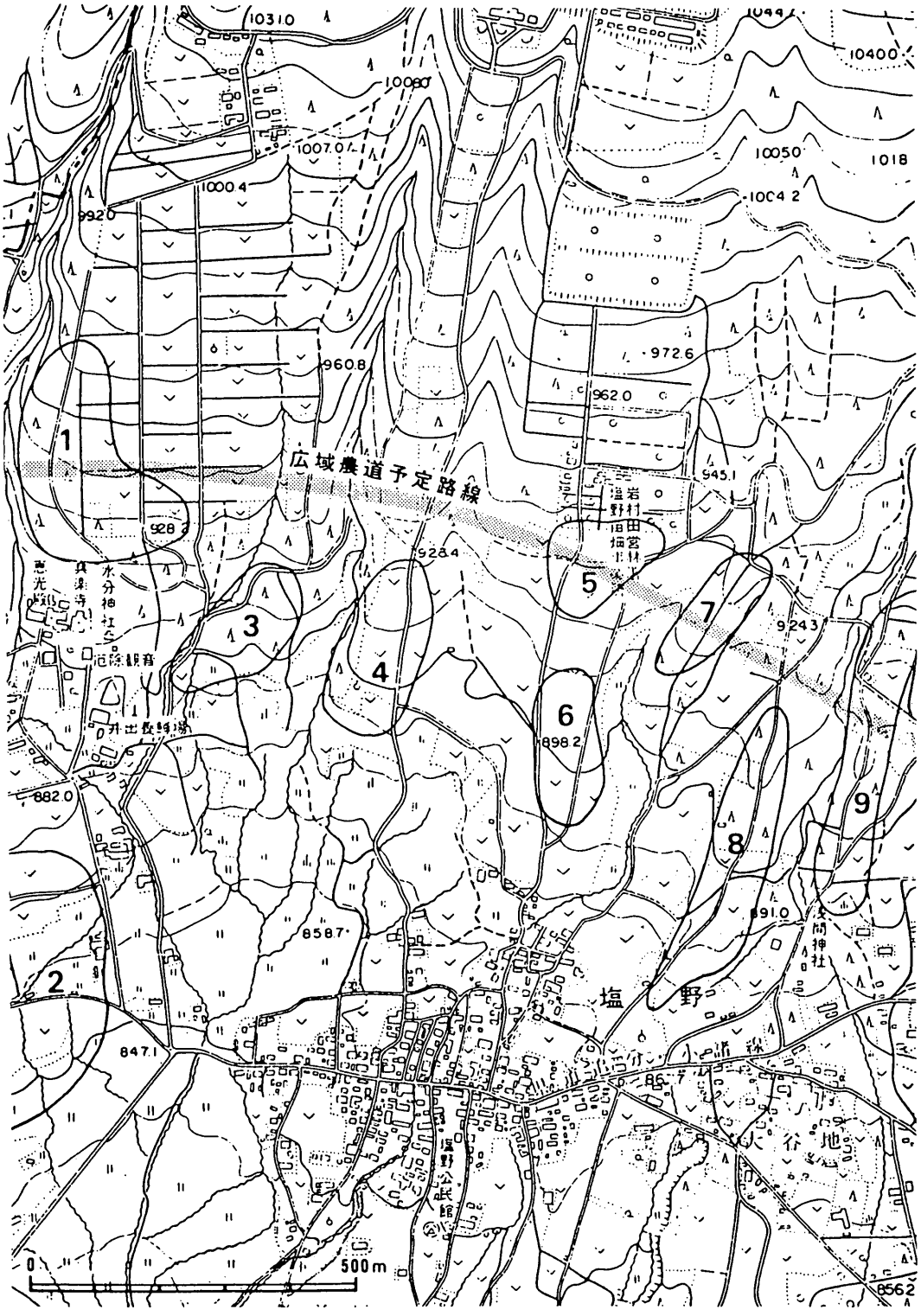
さて、奈良・平安時代において当地域には、延喜式記載の御牧『塩野牧』が設置されていたものと考えられている。その『塩野牧』の遺構と考えられる通称『駒飼の土堤』が、本遺跡の北東1kmの塩野山に残っており、塩野山遺跡として現在町の指定史跡にもなっている。それは一辺50m・幅6m・高さ1.5m前後を測る土堤が、東南部の角のみが切れて四角く囲い状にめぐるもので、その中において貢馬の放し飼いがなされたともいわれているものである。その『塩野牧』がどの程度の範囲におよんでいたかは不明であるが、本遺跡がその範囲の中に含まれている可能性は強いといえよう。よって、本遺跡から検出された平安時代住居に居住していた人は、その『塩野牧』に何らかの関連をもつ人であった可能性もでてきた。

一方、律令期に整備された官道『東山道』は小諸を過ぎると、必然的にこの御代田町のいずれかを通過していたと考えられている。しかし、そのルートについてはこれまでに解明がなされていない。現在のところそのルートについては、南より「小田井ルート説」・「馬瀬口ルート説」・「塩野ルート説」がだされている。「塩野ルート説」を取った場合、本遺跡の前方1km以内の場所を『東山道』が通過していたことになろう。

以上、本遺跡付近の歴史的環境について、縄文から平安時代までを簡略にふれてみた。

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	備考
1	大沼遺跡	御代田町大字塩野字大沼		○			○		昭和60年度発掘調査
2	滝沢遺跡	〃　字滝沢		○			○		
3	城の腰遺跡	〃　字城の腰		○	○	○			
4	細尾根遺跡	〃　字細尾根		○			○		
5	広畑遺跡	〃　字広畑		○		○	○		
6	狸窪遺跡	〃　字狸窪		○					
7	西駒込遺跡	〃　字駒込		○					発掘調査予定
8	上藤塚遺跡	〃　字上藤塚		○					
9	東二ツ石遺跡	〃　字東二ツ石		○					発掘調査予定



第3図　広畑遺跡（5）と周辺の遺跡分布（1：10,000）

III 層　序

広畑遺跡の基本層序については、第4図に示した。以下にその基本層序を説明する。

I層　耕作土層

黒色（10YR 2/3）を呈し、粒子細かくパサパサしてしまりなし。層厚15～20cm前後。

II層　黒色土層

黒色（10YR 2/1）。細粒パミスをよく含む。ややしまりあり。層厚5～10cm前後。

III層　黒褐色土層

黒褐色（10YR 3/2）。細粒パミスをよく含む。ややしまりあり。層厚20～25cm前後。

IV層　漸移層

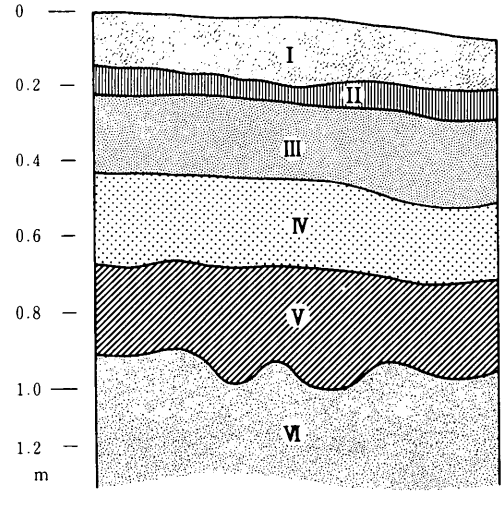
にぶい黄褐色（10YR 4/3）。ローム粒子を多く含み始める。細粒パミスをよく含む。層厚20～25cm前後。

V層　ローム層

黄褐色（10YR 5/6）。細粒パミスをよく含む。粘性なし。層厚25～30cm前後。

VI層　ローム層

にぶい黄橙色（10YR 6/4）。砂質。浅間山軽石流期の第2軽石流（約1万1千年前）。



第4図　広畑遺跡の基本層序

Ⅳ　遺構と遺物

Ⅰ　竪穴住居址

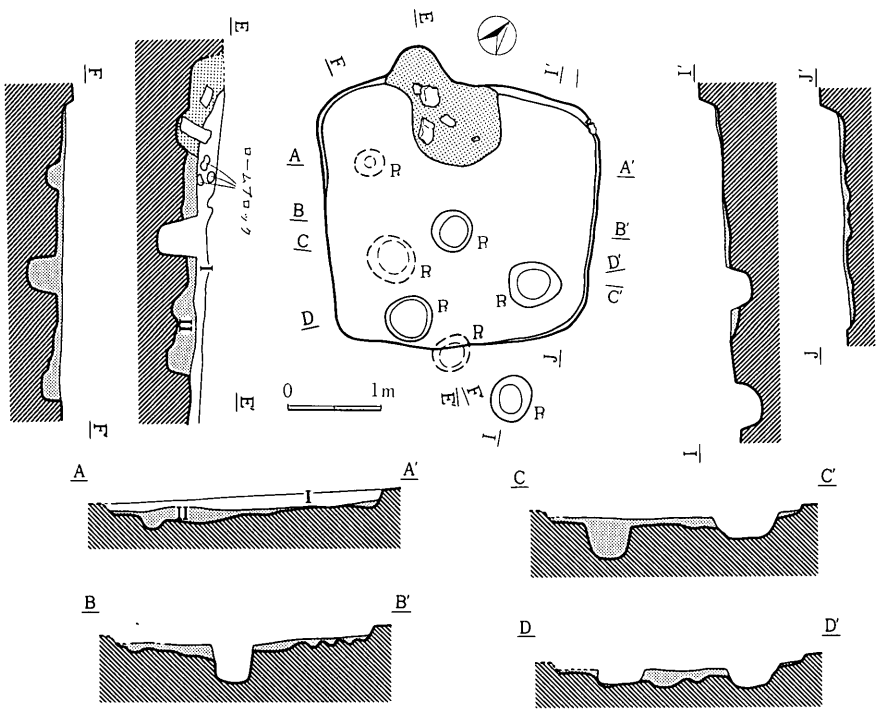
（1）　H－1号住居址

住居址　第5・6図

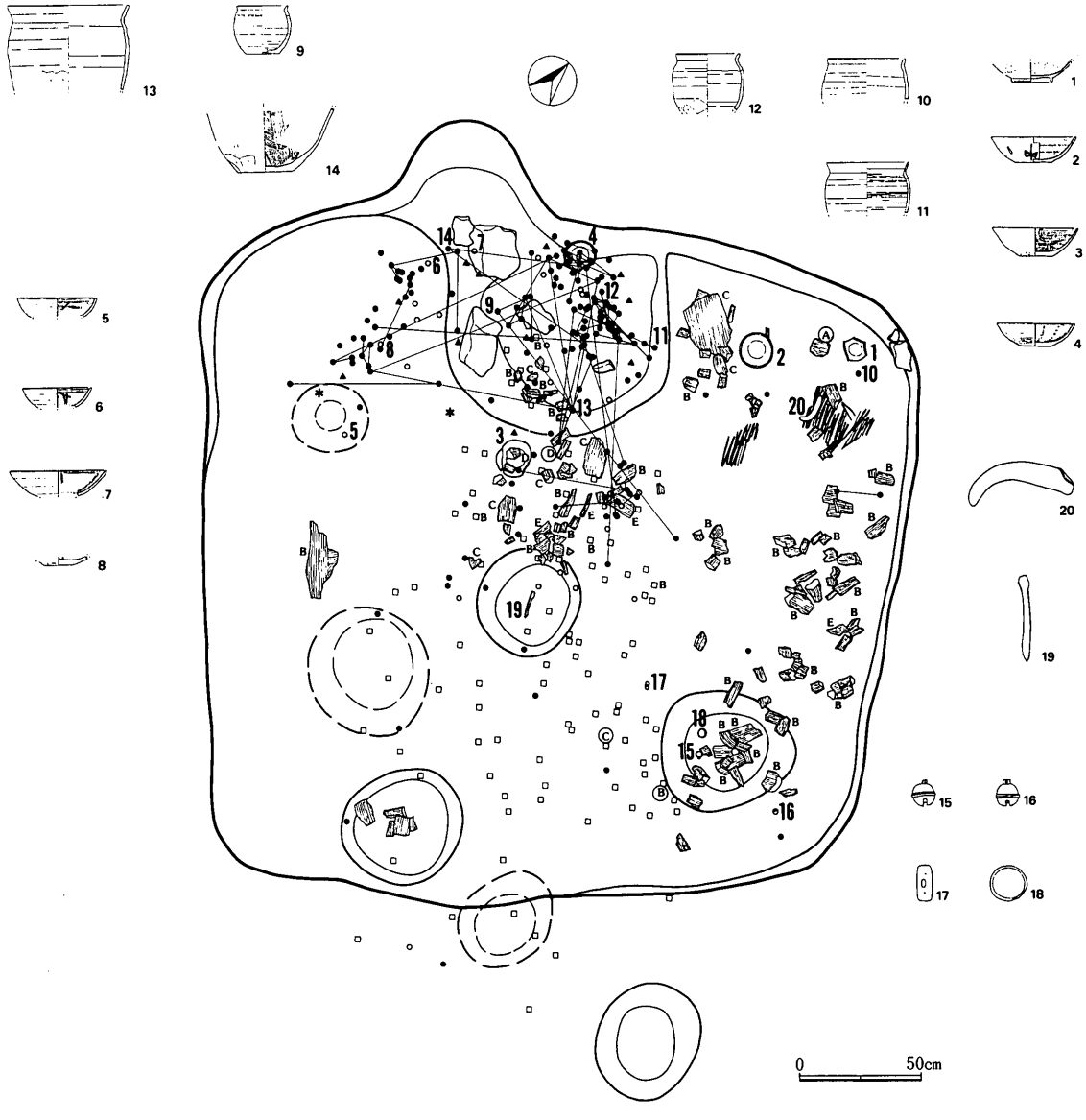
H－1号住居址は、ス－2グリッドにおいて検出された。

本址は、焼失住居址で、南北2.75m南北3.0m、ややいびつな隅丸長方形を呈し、床面積7.0m²を測り、南北軸方向はN－45°－Wを指す。壁高は、0～20cmを測る。壁溝は認められない。床面は、若干のロームを含む暗褐色土II層（10YR 3/4）を用いた貼り床で、その上面はかなり硬質であった。

ピットは、住居址の中央よりP_1が、南東壁際よりP_2が、北東コーナーよりP_3が検出された。また、床下からはP_4～P_6が、壁外からはP_7が検出された。P_1は40×40cmで深さ35cm、P_2は50×



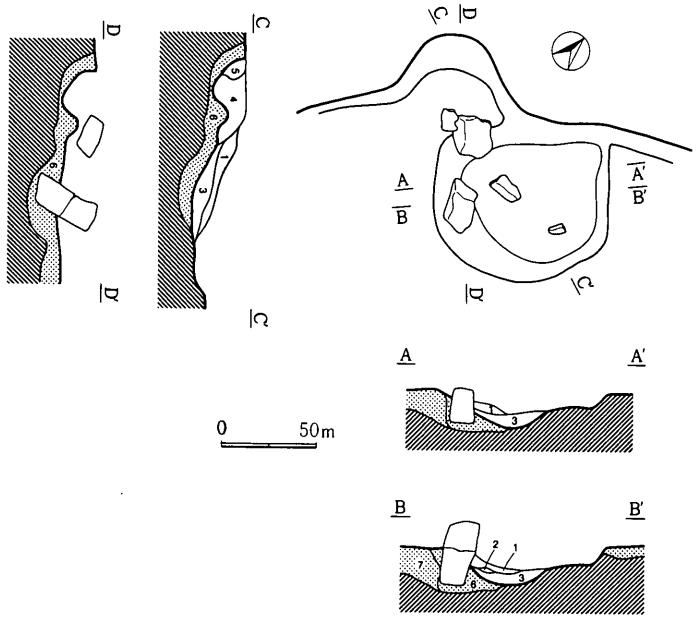
第5図　H－1号住居址実測図（1：80）



○ 坏・塊類（灰釉・土師器・須恵器）
● 甕（土師器）
▲ 甕（須恵器）
✱ スラグ
□ 炭化材

A　オニグルミ
B　コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
C　クリ
D・カツラ
E　樹皮
アルファベットに○は顕微鏡写真を付した材

第６図　Ｈ－１号住居址遺物及炭化材の分布（１：30）



第7図　H－1号住居址カマド実測図（1：40）

35cmで深さ15cm、P_3は55×50cmで深さ25cm、P_4は30×25cmで深さ20cm、P_5は55×50cmで深さ40cm、P_6は45×35cmで深さ20cm、P_7は50×40cmで深さ25cmを測る。

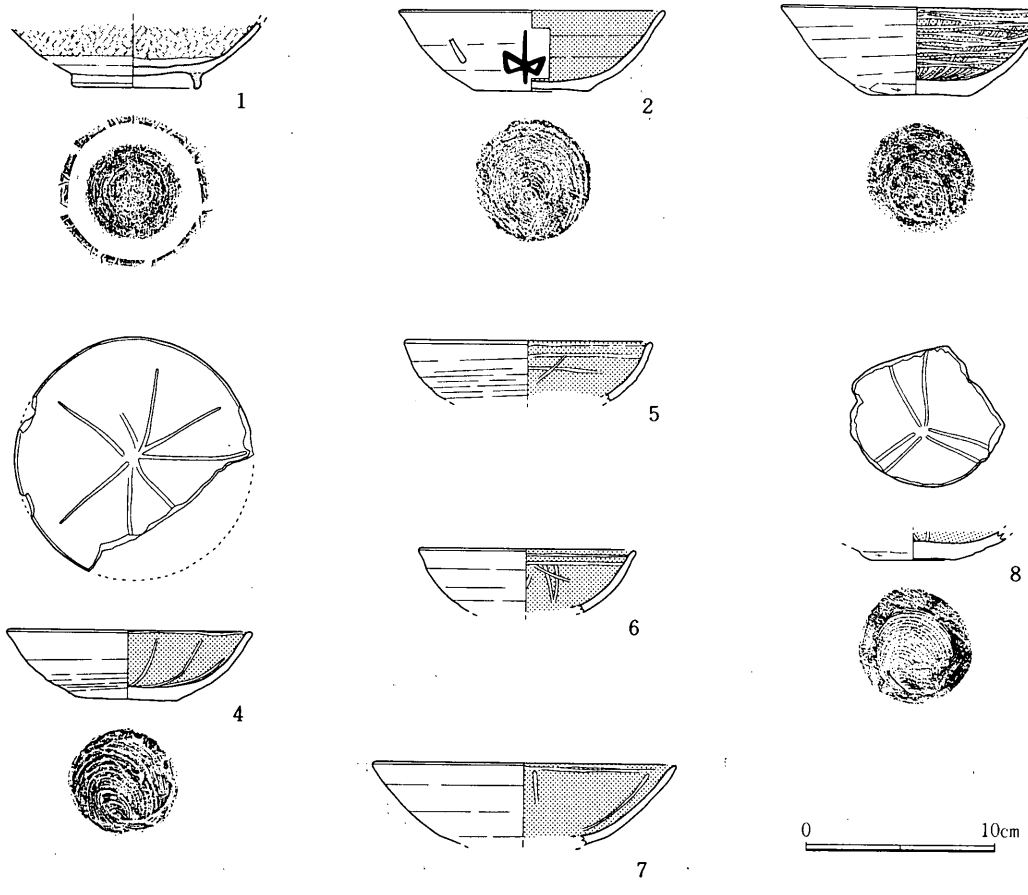
覆土は、1層のみである。I層は大量のカーボン・若干の明褐色焼土(7.5YR 5/6)を含み、粘性のない黒色土層（10YR 1.7/1）であった。

掘り方は、平坦ではなく、東壁際が深く落ち込み、細かい凹凸の激しい所謂蜂の巣状をみせていた。

炭化材と遺物の分布　第6図

炭化材は、住居址全体に分布をみせた（ただし、図では南壁際に分布が認められないが、これは耕作によって除去されてしまっている状態と考えられる)。このなかで、屋根材として使用されていたともみられるカヤ状の炭化材は、北コーナー部分より検出されている。これらの炭化材はいずれも住居の構築材と考えられるが、このうち45点については、㈱パリノ・サーヴェイによって樹種が同定されている（付編参照)。それによると、Aオニグルミ・Bコナラ属（コナラ亜属コナラ節）・Cクリ・Dカツラの4種類の樹種が認められている。

一方、土器類の分布は、全体的にカマド周辺に集中する傾向が窺えた。その出土状態の良好なものでは、1の灰釉陶器埦と2の土師器坏が北コーナーより、3・4の土師器坏がカマド近辺の床面直上より正常位で検出された。また、金属製品では、20の鎌が北コーナーより、16の鈴が東コーナーより、15の鈴・18鉄製品がP_3中より、19の釘がP_1中より出土した。また、カマドの西脇



第8図　H－1号住居址出土遺物（1：4）

よりスラグ（＊）が出土している。

カマド　第7図

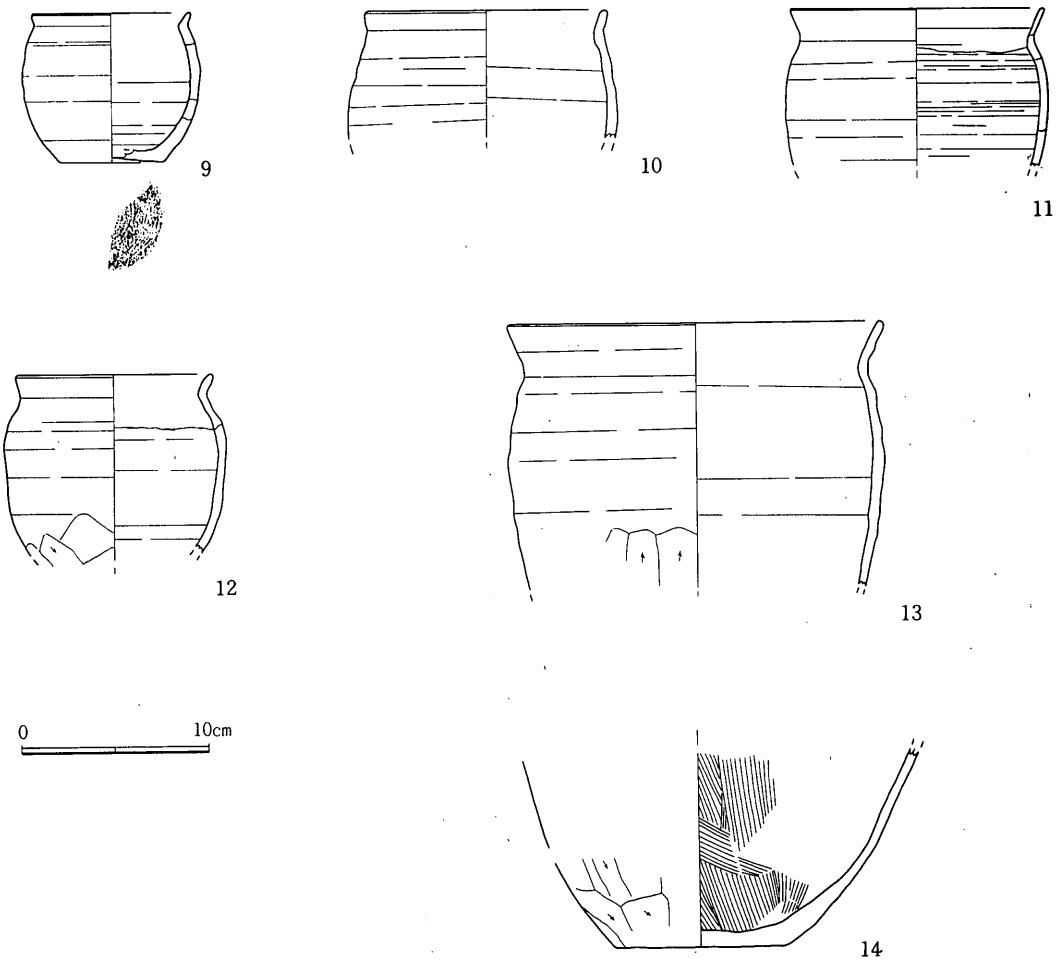
カマドは、住居址の西壁の西南コーナー寄りに存在している。

本カマドは、その南側の袖の構材である安山岩礫（a）が原位置を留めるのみで、他の構材（いずれも安山岩礫）は原位置を遊離していた。その構築土には、暗褐色土（6層　10YR 3/4）・ロームの若干混じる黒褐色土（7層　10YR 2/2）が用いられていた。

本カマドの覆土は、5層に分層された。1層は焼土をよく含む極暗赤褐色土層（5 YR 2/4)、2層はにぶい橙色の灰層（7.5YR 6/4)、3層は赤褐色焼土層（5 YR 4/8)、4層は焼土をよく含む黒褐色土層（7.5YR 2/2)、5層は褐色焼土層（7.5YR 4/6）である。

遺　物　第8・9・10図

遺物は、灰釉陶器埦、須恵器では甕、土師器では坏・甕、銅製品では鈴・飾金具、鉄製品では



第９図　Ｈ－１号住居址出土遺物（１：４）

鎌・釘等が検出されている。

１は、釉が刷毛掛けによる灰釉陶器埦で、東濃条光ケ丘１号窯期の製品に比定されよう。口縁部を欠損する。

２～８は、内面黒色処理のなされた土師器坏で、２・３・４・８は回転糸切りの底部が残る。また、４・８には放射状暗文が認められる。２には『⋈』と、判読できないがもう一字の墨書が認められる。

９～13は、ロクロ整形による土師器甕で、９には回転糸切りの底部がみえる。その大きさでは、小形（９）・中形（10～12）・大形（13）の器形がみられる。

15・16は、青銅の鈴であるが、金張りはなされていない。また、その内部には発音のための径

第２表　Ｈ－１号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	埦 (灰)	— — 6.9	体部は丸みを帯びて外反し、底部には高台が貼り付けられる。 (東濃光ケ丘１号窯式期)	外面　体部ロクロヨコナデ（釉は刷毛掛け） 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明 内面　ロクロヨコナデ　（ロクロ右回転）	胎土は比較的精選され灰白色 (10Y8/1)
2 (完)	坏 (土)	14.1 4.2 6.2	体部はやや丸みを帯びて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。完形。体部に「ㅛ」「？」の墨書あり。	外面　体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り未調整 内面　黒色研磨　（ロクロ右回転）	胎土は精選されずにぶい黄橙色 (10YR6/4)
3 (完)	坏 (土)	14.4 4.6 5.2	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ　（ロクロ左回転）	胎土は精選されずにぶい赤褐色 (5YR5/4)
4 (完)	坏 (土)	13.0 3.8 5.5	体部はやや丸みを帯びて外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り未調整 内面　黒色研磨（放射状暗文）　（ロクロ左回転）	胎土は精選されずにぶい橙色 (7.5YR6/6)
5 (回)	坏 (土)	〈13.3〉 — —	体部はやや丸みを帯びて外反する。	外面　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨　（ロクロ左回転）	胎土は精選されずにぶい黄橙色 (10YR7/4)
6 (回)	坏 (土)	〈11.6〉 — —	体部はやや丸みを帯びて外反する。	外面　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨　（ロクロ回転方向不明）	胎土は精選されずにぶい赤褐色 (5YR5/4)
7 (回)	坏 (土)	〈16.2〉 — —	体部は外反する。 あるいは高台が付され、埦となるか。	外面　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨（放射状暗文）　（ロクロ左回転）	胎土は精選されずにぶい黄橙色 (10YR7/4)
8 (完)	坏 (土)	— — 4.5	底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ 内面　黒色研磨（放射状暗文）　（ロクロ右回転）	胎土は精選されずにぶい黄橙色 (10YR7/3)
9 (回)	甕 (土)	〈 8.4〉 7.9 〈 5.5〉	口縁部は短く外反し、底部平底。	外面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り未調整 内面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい赤色 (5YR4/4)
10 (回)	甕 (土)	〈13.0〉 — —	口縁部はゆるく外反する。	外面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ 内面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ （ロクロ右回転）	胎土は精選されずにぶい黄橙色 (10YR7/3)
11 (回)	甕 (土)	〈14.3〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ 内面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ （ロクロ右回転）	胎土は精選されずにぶい黄橙色 (10YR7/3)
12 (回)	甕 (土)	〈10.5〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は胴部上半にある。	外面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ 内面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ （ロクロ右回転）	胎土は精選されずにぶい黄橙色 (10YR7/3)
13 (回)	甕 (土)	〈20.2〉 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面　口縁部・胴部上半ロクロヨコナデ 胴部下半ヘラケズリ 内面　口縁部・胴部ロクロヨコナデ（ロクロ右回転）	胎土は砂粒を含みにぶい赤色 (5YR4/4)
14 (回)	甕 (土)	— — 〈14.3〉	底部平底。	外面　底部・胴部下半ヘラケズリ 内面　底部・胴部下半刷毛目状調整	胎土は精選されず淡黄橙色 (2.5Y8/3)

５～７㎜程の小石各一個がみられる。

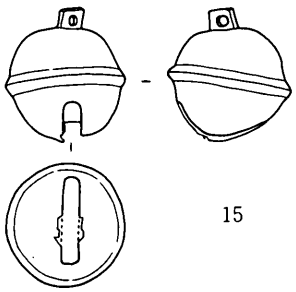
17は、青銅の飾金具と考えられるが、金張りはなされていない。また、その中央部には楕円形の穴があり、その両脇には釘穴と考えられる穴が認められる。

18は、円盤状の鉄製品で、板状の素材によって構成され、内部は空洞となっているもの

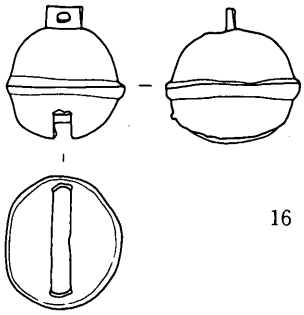
第３表　Ｈ－１号住居址出土遺物一覧表〈銅製品・鉄製品〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
15	鈴	青銅	2.25	2.00	2.05	2.26	
16	鈴	青銅	2.20	2.00	2.20	2.13	
17	飾金具	青銅	3.00	1.25	0.04	1.03	
18	不明	鉄	2.90	2.90	1.00	7.49	
19	釘	鉄	1.90	1.30	0.50	24.38	
20	鎌	鉄	13.10	2.70	0.50	30.99	右鎌

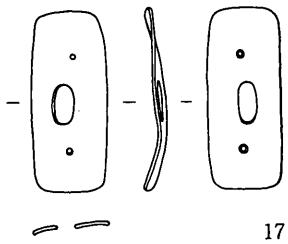
※単位はcm，g



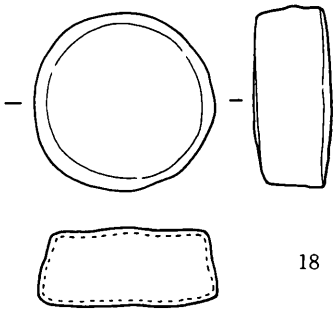
15



16



17

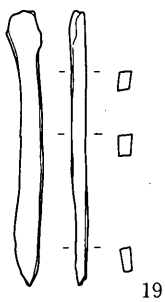


18

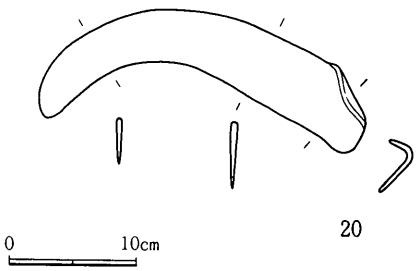
0　5cm

であるが、用途は不明である。

19は、鉄釘である。また、20は完形の鉄鎌で、基部の屈曲を表面に置くと刃部が左側へと向く、いわゆる「右鎌」である。



19



20

0　10cm

第10図　H－1号住居址出土遺物
（15～18＝4：5　19・20＝1：3）

時　期

本住居址は、その土器様相から、御代田町大字御代田の『鋳師屋遺跡群根岸遺跡』の土器編年（堤　1989）等の成果を援用して、9世紀第IV四半期に位置付けられよう。

^{14}C年代

本住居の炭化材については、^{14}C年代測定をおこなってみた（付編1）。測定値はBP1050±25年であり、ADに換算すると900年を中央値として、875～925年となる。この測定値は9世紀第IV四半期という本住居址の考古年代とも矛盾していない。

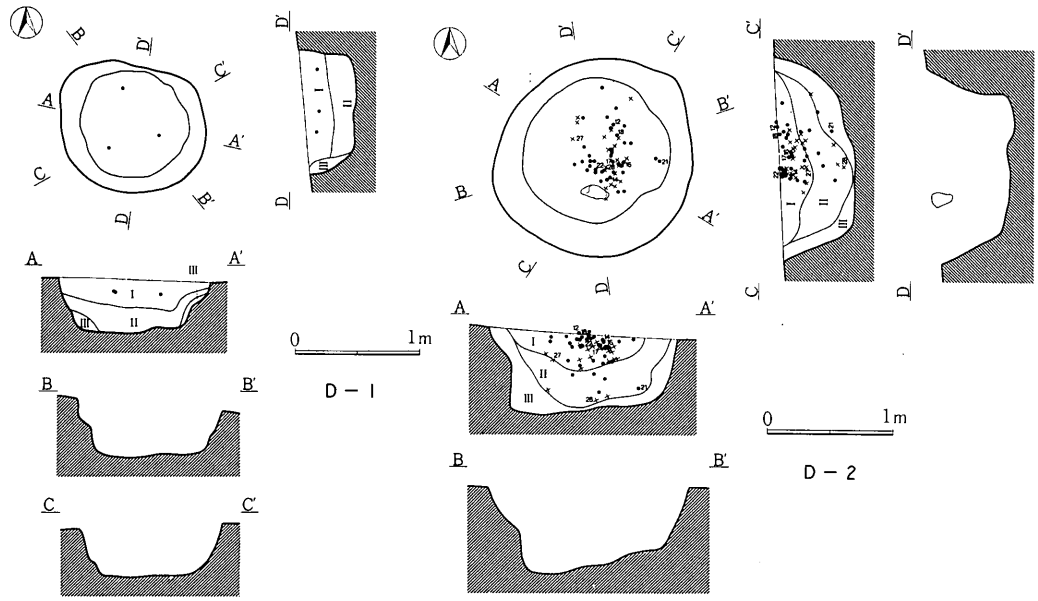
2　土　　壙

（1）　D－1号土壙　（第11図）

D－1号土壙は、シー3グリッドにおいて検出された。1.2×1.1mの不整円形を呈し、深さ0.4mを測る。覆土は3層に分層された。I層は細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層も細粒パミスをよく含みしまりのない黒褐色土層（10YR 2/2)、III層はローム粒子をよく含みしまりのない暗褐色土層（10YR 3/3）であった。遺物は縄文時代中期後半の土器細片3片が出土しているのみで、図示するには至らなかった。なお、本土壙の所産期は不明である。

（2）　D－2号土壙　（第11図）

D－2号土壙は、シー3グリッドにおいて検出された。1.7×1.6mのほぼ円形を呈し、深さ0.7mを測る。覆土は3層に分層された。I層は細粒パミスを多く含みしまりのない黒色土層(10YR 2/1)、II層も細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層（10YR 1.7/1)、III層はローム粒子を大量に含みしまりのない暗褐色土層(10YR 4/3)であった。遺物は、土壙内に廃棄されたと考えられる縄文土器片41片（加曽利E 4期～称名寺期）・石器18点（ピエス・エスキーユ、磨石、砕片等）が出土しておりこのうちの数点を図示した（第24図12・14、第25図16～18・21・22、第25図27・



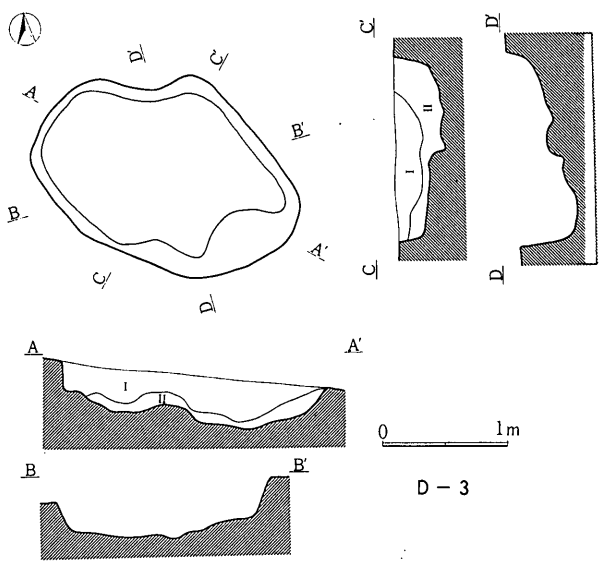
第11図　D－1・D－2号土壙実測図（1：60）

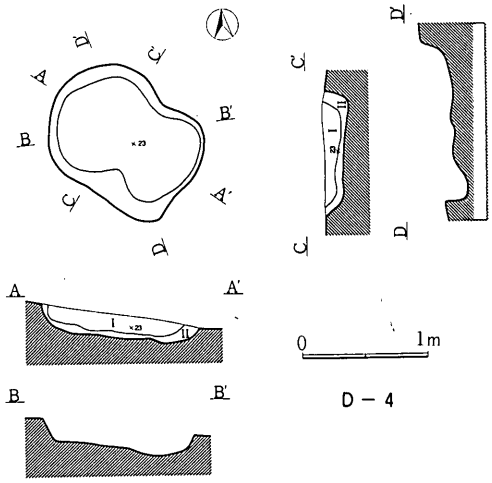
28)。なお、本土壙の所産期は、土器の示す加曽利E 4 期～称名寺期か、それ以前と考えられよう。

(3)　D－3号土壙

(第12図)

D－3号土壙は、セ－3グリッドにおいて検出された。2.2×1.5mの不整楕円形を呈し、深さ0.5mを測る。覆土は2層に分層された。I層は細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を多量に含みしまりのない暗褐色土層(10YR 3/4)であった。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。





第12図　D－3・D－4号土壙実測図
(1：60)

(4)　D－4号土壙　(第12図)

D－4号土壙は、ソ－3グリッドにおいて検出された。1.3×0.9mの不整繭形を呈し、深さ0.2mを測る。覆土は2層に分層された。I層は細粒パミスを含みやや粘性のある黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を多量に含みしまりのない褐色土層(10YR 4/4)であった。遺物は、第23図23のチャートの石鏃が検出されているのみである。なお、本土壙の所産期は不明である。

(5)　D－5号土壙　(第13図)

D－5号土壙は、ス－2グリッドにおいて検出された。1.8×1.2mの不整楕円形を呈し、深さ0.5mを測る。覆土は2層に分層された。I層は中粒パミスを若干含む黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を多量に含みしまりのない黒褐色土層(10YR 2/3)であった。遺物は縄文時代中期後半の土器細片3片が出土しているのみで図示するには至らなかった。なお、本土壙の所産期

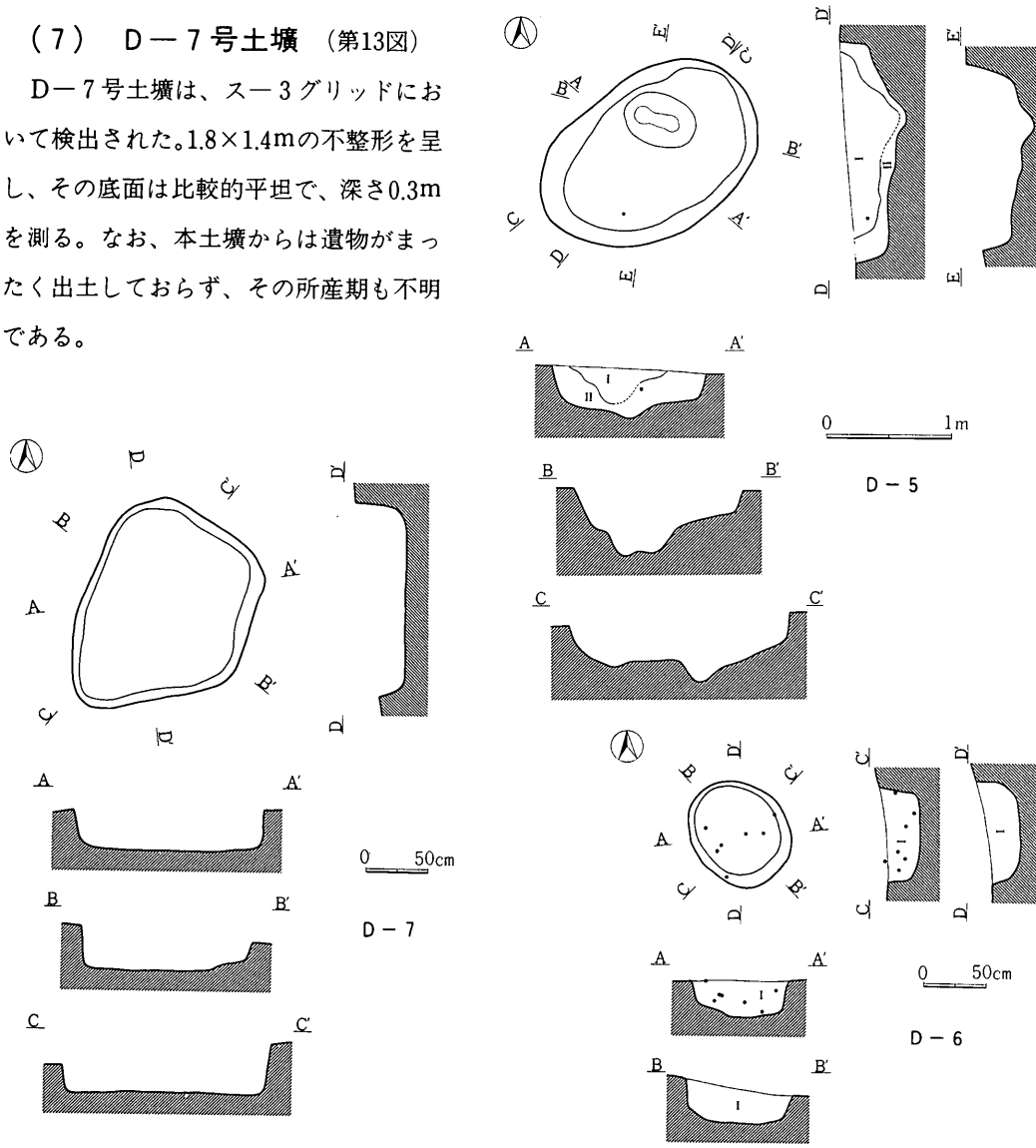
は不明である。

（6）　D－6号土壙　（第13図）

D－6号土壙は、ス－3グリッドにおいて検出された。0.9×0.8mの不整円形を呈し、深さ0.3mを測る。覆土は1層のみで、Ⅰ層は細粒パミスを若干含む黒色土層（10YR 1.7/1）であった。遺物は縄文時代中期後半の土器細片7片が出土しているのみで図示するには至らなかった。なお、本土壙の所産期は不明である。

（7）　D－7号土壙　（第13図）

D－7号土壙は、ス－3グリッドにおいて検出された。1.8×1.4mの不整形を呈し、その底面は比較的平坦で、深さ0.3mを測る。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。



第13図　D－5～D－7号土壙実測図（1：60）

(8)　D－8号土壙

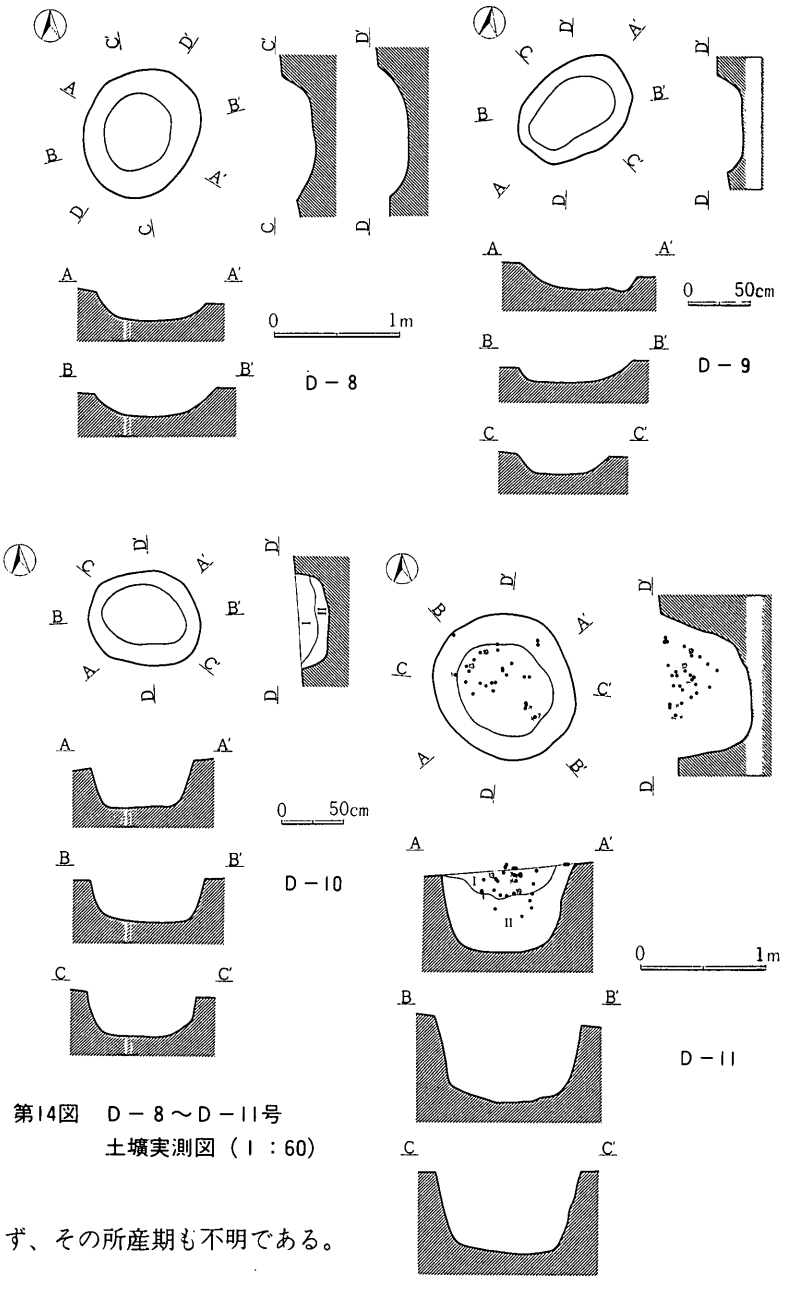
(第14図)

D－8号土壙は、ス－3グリッドにおいて検出された。1.1×0.9mの円形を呈し、その断面は擂鉢状を呈し、深さ0.2mを測る。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

(9)　D－9号土壙

(第14図)

D－9号土壙は、セ－3グリッドにおいて検出された。1.0×0.7mの不整楕円形を呈し、その断面は擂鉢状を呈し、深さ0.15mを測る。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。



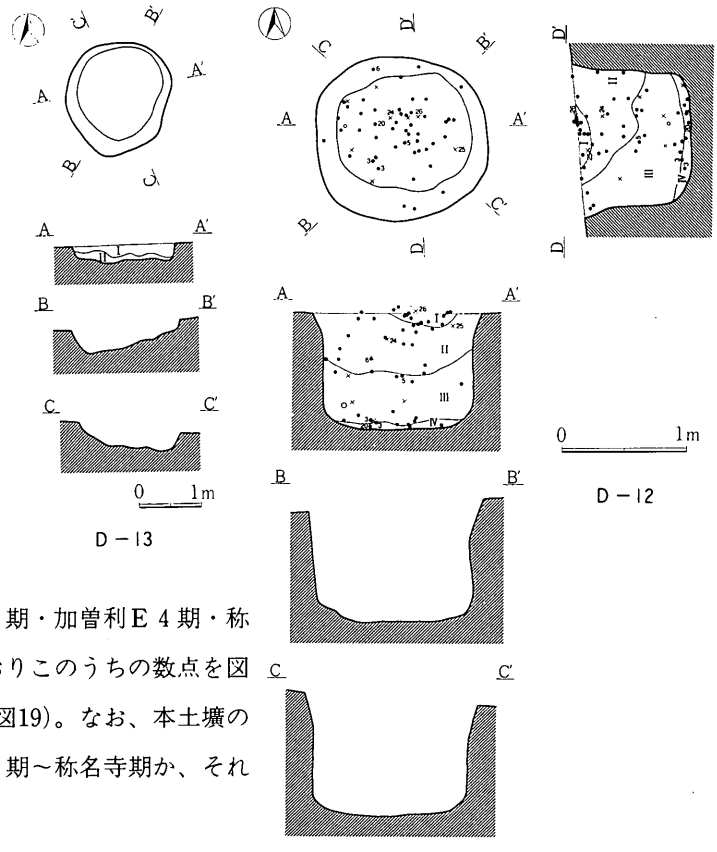
第14図　D－8～D－11号土壙実測図（1：60）

(10)　D－10号土壙　(第14図)

D－10号土壙は、サ－3グリッドにおいて検出された。0.9×0.8mの不整楕円形を呈し、その断面は逆D字状を呈し、深さ0.3mを測る。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

(11)　D－11号土壙（第14図）

D－11号土壙は、シー3グリッドにおいて検出された。1.2×1.1mの円形を呈し、その断面は逆D字状を呈し、深さ0.6mを測る。覆土は2層に分層された。I層は細粒パミスを若干含む黒色土層（10YR 1.7/1）、II層はローム粒子を含みしまりのない黒褐色土層（10YR 2/3）であった。遺物は、縄文土器片24片（加曽利E3期・加曽利E4期・称名寺期）・石器2点が出土しておりこのうちの数点を図示した（第24図1・7．13、第25図19）。なお、本土壙の所産期は、土器の示す加曽利E3期～称名寺期か、それ以前と考えられよう。



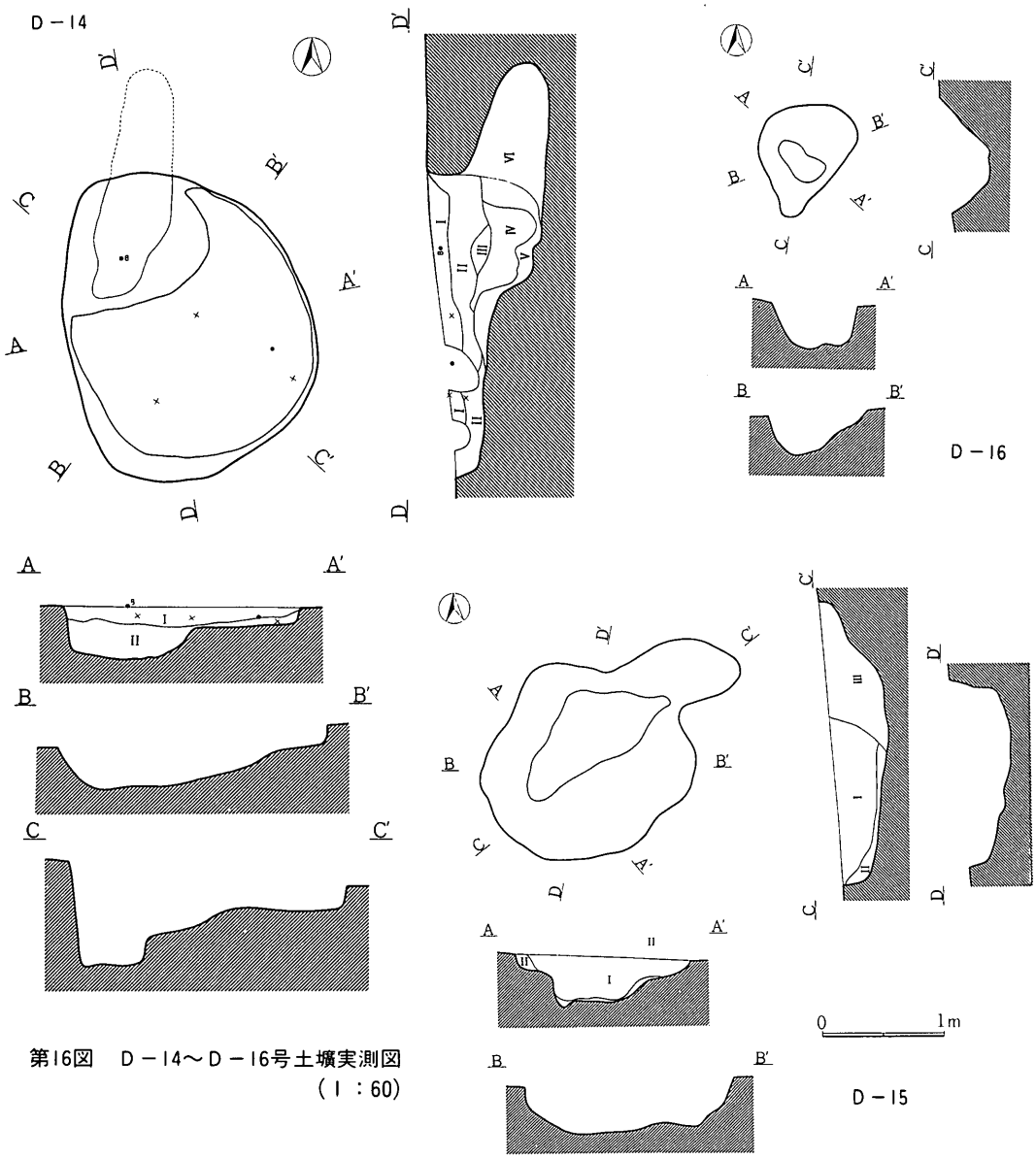
第15図　D－12・D－13号土壙実測図（1：60）

(12)　D－12号土壙　（第15図）

D－12号土壙は、シー3グリッドにおいて検出された。1.4×1.3mの不整円形を呈し、深さ0.9mを測る。覆土は4層に分層された。I層は褐色焼土層（10YR 4/4）、II層は細粒パミスを若干含む黒色土層（10YR 2/1）、III層は細粒パミスを若干含みローム粒子を多量に含むしまりのない黒褐色土層（10YR 2/3）、IV層は黒色土層（10YR 1.7/1）であった。遺物は、縄文土器片57片（加曽利E3期～称名寺期）・石器8点（石鏃・砕片）・カーボン1点が出土しており、このうち数点を図示した（第24図3・5・6、第25図20、第23図24・25・26）。なお、本土壙の所産期は、土器の示す加曽利E3期～称名寺期か、それ以前と考えられよう。

(13)　D－13号土壙　（第15図）

D－13号土壙は、シー2グリッドにおいて検出された。0.9×0.8mの不整楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。覆土は2層に分層された。I層は細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層（10YR 1.7/1）、II層はローム粒子を含みしまりのない暗褐色土層（10YR 3/4）であった。なお、本土壙



第16図　D－14～D－16号土壙実測図
(1：60)

からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

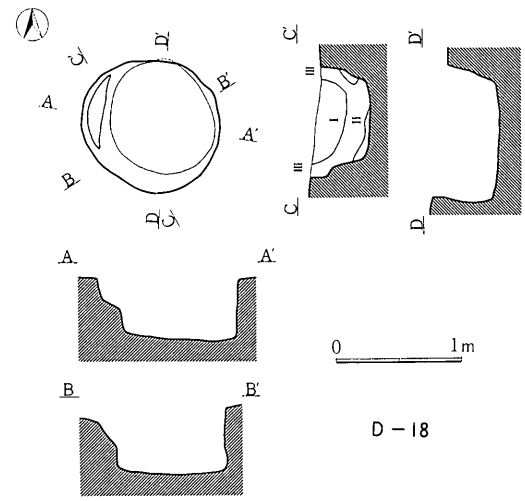
(14)　D－14号土壙　(第16図)

D－14号土壙は、シ－2グリッドにおいて検出された。2.1×1.7mの不整楕円形を呈し、深さ0.9mを測る。なお、その底面は横穴状に延びていた。覆土は6層に分層された。I層は細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR 2/3)、III層は黒色土層(10YR 1.7/1)、IV層はローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 2/3)、V

・Ⅵ層は黄褐色ローム層（10YR 5/6）であった。遺物は、縄文土器片２片（加曽利Ｅ３期）・石器３点が出土しており、このうち第24図８を図示した。なお、本土壙の所産期は、土器の示す加曽利Ｅ３期か、それ以前と考えられよう。

(15)　Ｄ－15号土壙　（第16図）

Ｄ－15号土壙は、コ－２グリッドにおいて検出された。2.4×1.6mの不整形を呈し、深さ0.5mを測る。覆土は３層に分層された。Ⅰ層は細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層（10YR 1.7/1）、Ⅱ層はローム粒子を多く含みしまりのない黒褐色土層（10YR 3/2）、Ⅲ層は褐色ローム層（10YR 4/4）であった。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。



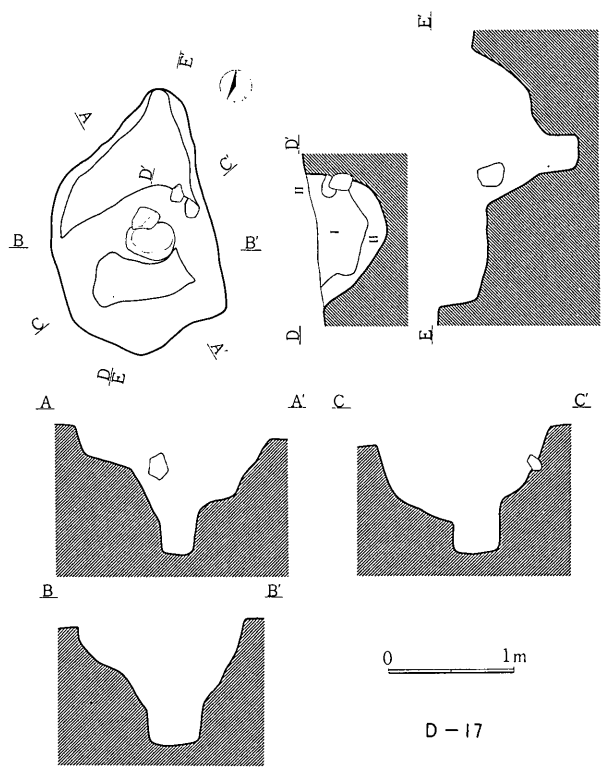
(16)　Ｄ－16号土壙　（第16図）

Ｄ－16号土壙は、ケ－３グリッドにおいて検出された。1.0×0.7mの不整形を呈し、深さ0.4mを測る。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

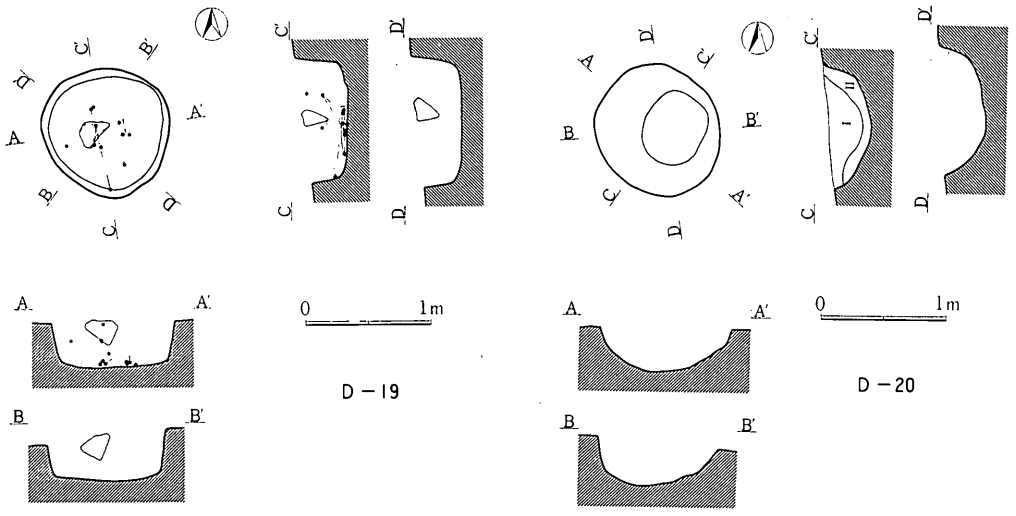
(17)　Ｄ－17号土壙

（第17図）

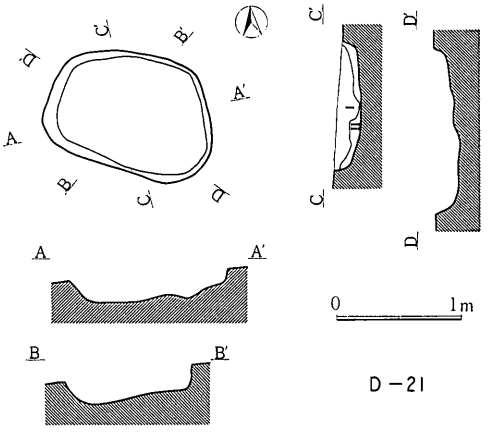
Ｄ－17号土壙は、ケ－３グリッドにおいて検出された。2.1×1.4mの不整形を呈し、ロート状の断面をみせ、深さ1.0mを測る。覆土は２層に分層された。Ⅰ層は細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層（10YR 1.7/1）、Ⅱ層はローム粒子を多く含む



第17図　Ｄ－17・Ｄ－18号土壙実測図（１：60）



第18図　D－19～D－21号土壙実測図（1：60）



褐色土層（10YR 4/4）であった。なお、本土壙中には安山岩礫3点が認められたが、遺物はまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

(18)　D－18号土壙　（第17図）

D－18号土壙は、ス－2グリッドにおいて検出された。1.1×1.1mの円形を呈し、深さ0.5mを測る。覆土は3層に分層された。I層は細粒パミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）、II層は黒色土層（10YR 1.7/1）、III層はローム粒子を多量に含みしまりのない暗褐色土層（10YR 3/4）であった。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

(19)　D－19号土壙　（第18図）

D－19号土壙は、シ－3グリッドにおいて検出された。1.0×1.0mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。本土壙中には安山岩礫1点が認められた。遺物は土器片11片が検出され、何点かが接合をみ第24図1の深鉢（加曽利E 3）となった。よって、本土壙の所産期は、土器の示す加曽利E 3期か、それ以前と考えられよう。

(20)　D－20号土壙　(第18図)

D－20号土壙は、キ－2グリッドにおいて検出された。1.05×1.05mの円形を呈し、深さ0.35mを測る。覆土は2層に分層された。I層は細粒パミス・ローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR 2/2)、II層はローム粒子を多量に含みしまりのない暗褐色土層(10YR 3/4)であった。なお、本土壙からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

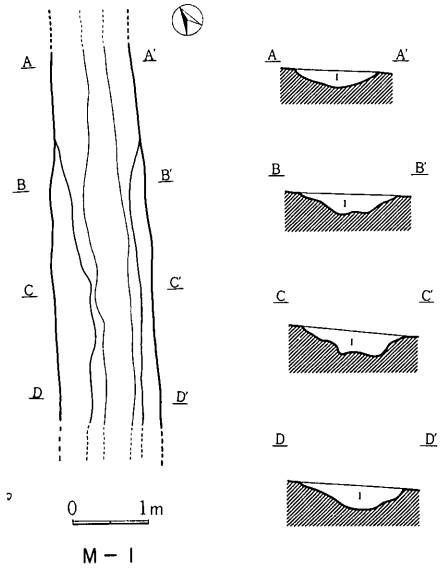
(21)　D－21号土壙　(第18図)

D－21号土壙は、キ－2グリッドにおいて検出された。1.35×1.0mの不整形を呈し、深さ0.2mを測る。覆土は2層に分層された。I層は細粒パミス・ローム粒子を若干含む黒色土層(10YR 2/1)、II層はローム粒子を多量に含みしまりのない黄褐色土層(10YR 5/6)であった。なお、本土壙からは遺物はまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

3　溝状遺構

(1)　M－1号溝状遺構　(第19図)

M－1号溝状遺構は、ス－2・3グリッドにおいて検出された。南北にほぼ一直線に延びる溝で、幅1.3m、深さ0.3mを測る。覆土は1層で、細粒パミスをよく含みしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)である。本溝状遺構は、あるいは人工的な溝と考えてよいものであろう。なお、本溝からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。



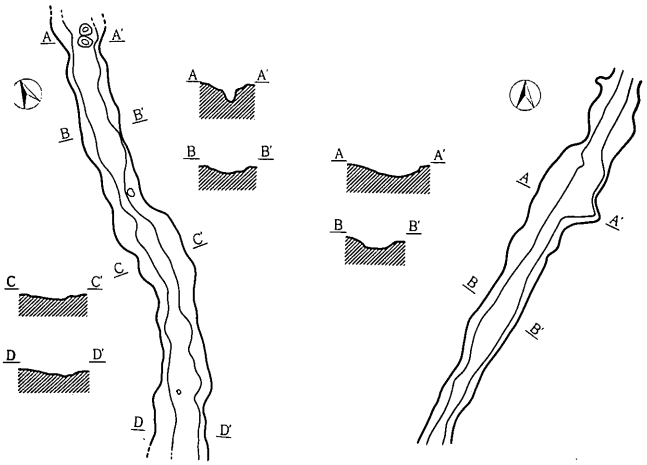
第19図　M－1号溝状遺構(1：100)

(2)　M－2号溝状遺構　(第20図)

M－2号溝状遺構は、サ－2・3グリッドにおいて検出された。南北に蛇行して延びる溝で、幅0.5～0.8m、深さ0.1mを測る。おそらく自然流路であろう。なお、本溝からは第25図29の石鏃が検出されている以外は、遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。

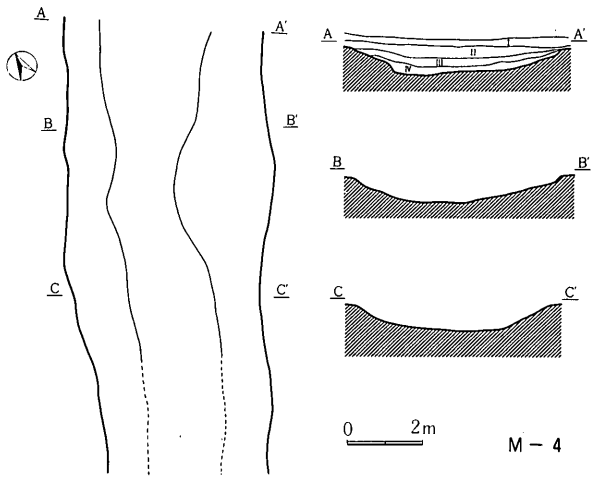
（3）　M－3号溝状遺構　（第20図）

M－3号溝状遺構は、エ－2・3グリッドにおいて検出された。南北にほぼ直線的に延びる溝で、幅0.6～0.9m、深さ0.2mを測る。おそらく自然流路であろう。なお、本溝からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。



（4）　M－4号溝状遺構　（第20図）

M－4号溝状遺構は、イ－2・3グリッドにおいて検出された。南北ほぼ一直線に延びる溝で、幅2.2～2.6m、深さ0.3～0.5mを測る。あるいは人工的な溝と考えてよいものであろう。その覆土は4層に分層された。I層は黒褐色土層（10YR 2/2）、II層は細粒パミス等を全く含まない黒色土層（10YR 1.7/1）、III層は細粒パミスを若干含みローム粒子をよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）、IV層は暗褐色ローム層（10YR 3/4）であった。なお、本溝からは遺物がまったく出土しておらず、その所産期も不明である。



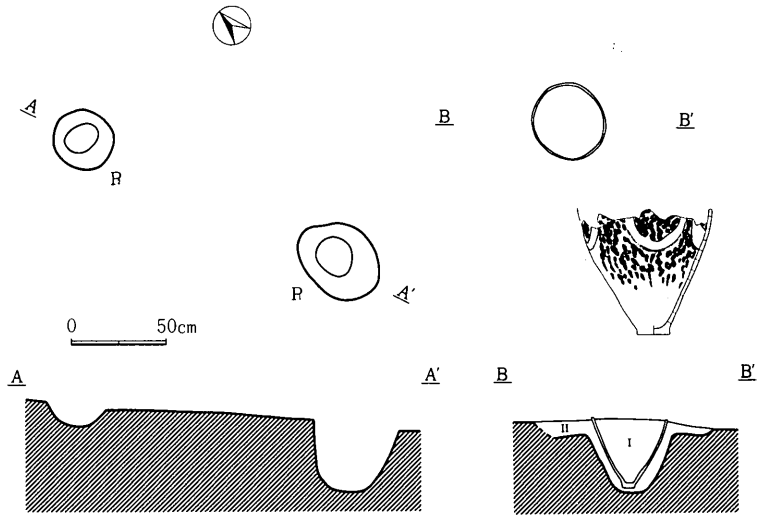
第20図　溝状遺構実測図（1：200）

4　埋　甕

（1）　U－1号埋甕　（第21図）

埋甕は、シ－2グリッドにおいて検出された。埋められていたのは、称名寺期に位置付けられる深鉢第21図1で、その上半を欠失する。埋甕内の覆土はしまりのない黒色土（I層　10YR 1.7/

1)で、遺物等は確認されなかった。本埋甕は屋外埋甕と考えられよう。埋甕外の埋土は、ローム粒子を若干含む黒褐色土層（II層　10YR 2/3）であった。なお、埋甕に隣接してP_1・P_2が確認されたが、相互に関連するものかどうかは不明である。P_1は50×38cm深さ35cm、P_2は33×30cm深さ10cmを測る。



第21図　U－1号埋甕実測図（1：40）

5　遺　　物

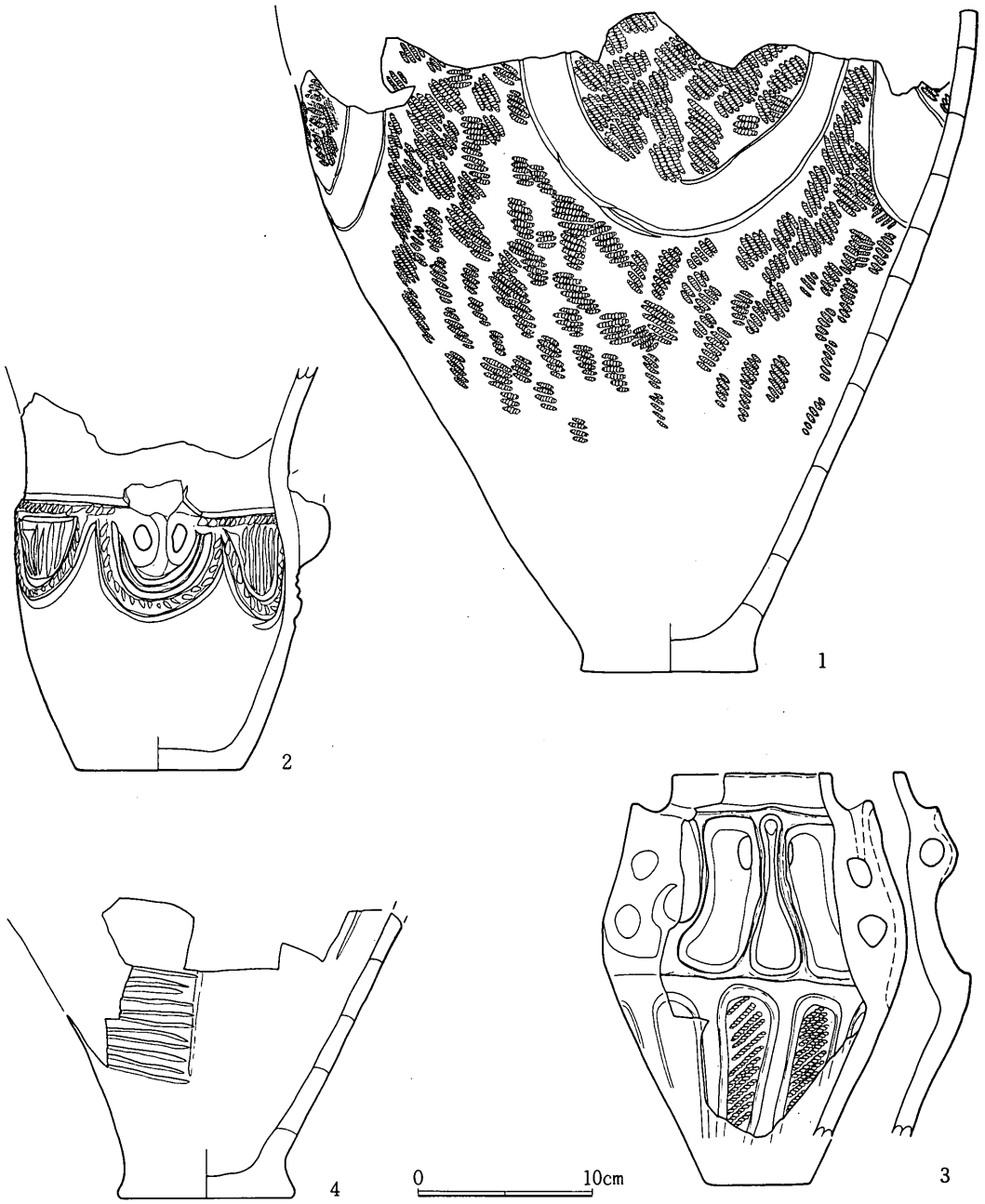
（1）　U－1号埋甕の土器

（第22図　1）

第22図1は、埋甕に用いられていた土器で、口縁から胴部下半の部分は、後世の撹乱によって破壊され失なわれてしまったものである。器形は、胴部が張り底部に向って窄まり、底部が突出する特徴をもつ。沈線文は、J字状区画あるいは逆J字状区画が施されていたと想定される。地文は、LR縄文で、区画外に施されている。施文手順は、沈線文の後に縄文が施されている。沈線文の施文具は、尖端を有する棒状工具である。器面は、外側では縦方向を基本として、斜位、横方向に調整されるが、内側では主に横方向に調整されている。外面調整は、施文された後にも行なわれ、縄文の一部が磨り消されている。時期は、縄文中期終末加曽利E4式期から後期初頭称名寺式期の過度的な土器である。縄文が胴部上半近くの部分で、縦方向の他、斜位、横位など不規則に施されている点と、器形において胴部の膨らみが顕著でない点から、称名寺式期の古段階に位置づけたい。

（2）　既出遺物　（第22図　2・3・4）

2・3・4は、広畑遺跡調査区近隣の既出遺物である。このうち2は、塩野内堀高治氏の所蔵品である。3は、塩野内堀典浩氏より、当教育委員会へ寄与されたもので、サ・シー3・4グ



第22図　広畑遺跡出土土器（1：4）

リッド付近で出土したものということである。また、4は、ス－3グリッドの既出遺物である。

第22図2は、口縁部が欠失しているが、ほぼ完形の土器である。器形は、底部から胴部にかけてやや膨らみを有し、胴部中頃でやや窄まる。文様は胴部中頃で、眼鏡状の突起が貼付され、そ

第4表　遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	文様 地文（原体）		文様 装飾（原体）		調整	胎土	色調	焼成	時期	備考
22－1	深鉢	—— (37.1) 10.1	縄文	LR	沈線文	棒状工具	内面　横・斜位方向、密	砂粒、小石、赤色スコリア粒	褐色	良	称名寺	埋甕
22－2	深鉢	—— (22.8) 9.4	沈線文	棒状工具	隆帯文(貼付)上に刻目把手	棒状工具	内面　横位方向の調整、密	砂粒、雲母、白色粒	褐色	良好	勝坂Ⅲ	
22－3	壺	(9.0) (23.0) ——	縄文	RL	隆起文突起	棒状工具	内面　横位方向、縦位方向の調整、密	砂粒、雲母、赤色スコリア粒	褐色	良好	加曽利E3	両耳壺
22－4	深鉢		沈線文	棒状工具	沈線文	棒状工具	内面　密 横位、縦位、斜位 外面　密 縦位、斜位、横位	砂粒、白色粒、雲母、赤色スコリア粒	褐色	良好	加曽利E3	

の上に刻目のある隆帯文が横走し、半円形の区画が形成される。区画内には、沈線文が充填され、また隆帯文に沿って沈線文が施される。器面調整は、内外面ともに密であり、口縁部付近から底部にかけて斜あるいは縦方向になされている。施文具および調整具は棒状工具が使用されている。時期は縄文時代中期中葉勝坂Ⅲ式期に相当する。

第22図3は、口縁部が窄まる「く」の字形を呈する器形で、2単位ずつ合計4個の把手を有する。文様は、屈曲する上半部分では隆起文による渦巻文が4箇所、把手の間に施される。口縁部では、隆起文は微隆起状に横走する。胴部下半では、棒状工具によって逆U字もしくは縦位楕円形の区画が施され、RL縄文が充填されている。縄文が施されたのは、区画がつけられる前である。この土器は、把手が橋状をなしている点と、口縁部の横走する隆起文が微隆起状を呈している点において、より加曽利E4式的な新しい要素を有するが、隆起文が完全な微隆起文になっていない点と、隆起文によって渦巻文のモチーフがみられること、胴部下半の沈線文は、縄文の後に施されている点より加曽利E3式期に含まれる。なお、3と類似した文様構成をもつものに神奈川県相模原市当麻遺跡の第64号住居址出土の土器があげられる（岡本ほか　1977）。これは、胴部上半から胴部下半にかけての大形破片で、胴上は3と同じく隆起文で渦巻文が描かれているが、胴下半は隆起文が垂下し、その中に条線文が綾杉条に施されている。また、異なる点は器形が、3ほど胴部中頃で屈曲していない点と把手が4単位でなく2単位であるところである。3は、胴部上半の文様からは、加曽利E3式でも新しく位置づけられている隆起文で胴部全体に渦巻文が描かれる壺形土器と類似する。因みに、当麻遺跡の事例は、住居址内覆土から口縁部文様帯を有する加曽利E3式土器とともに出土している。

第22図4は、胴部下半から底部まで遺存する大形破片であり、器形は、突出した底部から胴部

にかけて開口する。文様は、縦位に沈線文が施された後に、その間に横位沈線文が充填される。器面全体に無文部分を多くもつ。外面の器面調整が密で、縦位方向に研磨している。並行沈線文間に横位沈線文が充填される文様は、縄文時代中期後半加曽利Ｅ３式土器にみられるが、この場合には地文が先で、並行沈線文は後に施される。ところが、この土器は、施文手順が逆で、縦位沈線文を施した後に横位沈線文が施される。時期は、縄文中期後半加曽利Ｅ３式土器に相当する。

註　加曽利Ｅ式土器の文様の概念

「隆 線 文」　棒状工具によって施される幅広く深い沈線文を指す。時期的には、加曽利Ｅ３式土器の口縁部文様帯に用いられているのが一般的である。楕円区画、もしくは渦巻文と楕円区画の崩れたモチーフが描かれる。

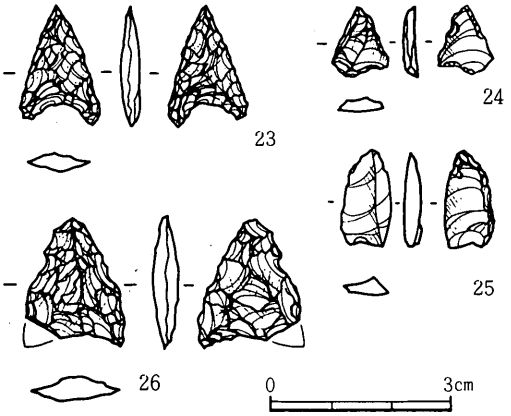
「隆 起 文」　棒状工具によって隆帯を調整したもので、この隆帯の断面が台形状をなしており、隆帯に沿った調整痕あるいは地文の磨り消しがみられる。単に「隆帯」とも呼称されているもので、時期的には加曽利Ｅ３式の新しいものとして認識されており、これを段階として細分する方向性がある。ここで、筆者は細分せず、加曽利Ｅ式土器を四段階で報告している。

「微隆起文」　隆帯を指でなで、あるいは器面を指または指のようなものでつまんで施文した文様で、時期的には加曽利Ｅ４式に特徴的にみられる。一部称名寺式土器に伴なうことが知られている。

（３）　土壙等出土遺物　（第23・24・25図、第５・６表）

土壙・溝状遺構出土遺物および表面採集遺物については、第23～25図、第５・６表に示してある。

土器では、縄文時代中期後半加曽利Ｅ３式期から後期初頭称名寺式期の、鉢・深鉢・壷等がみられている。石器では、石鏃・ピエスエスキーユ・磨石・敲石・打製石斧等が認められた。

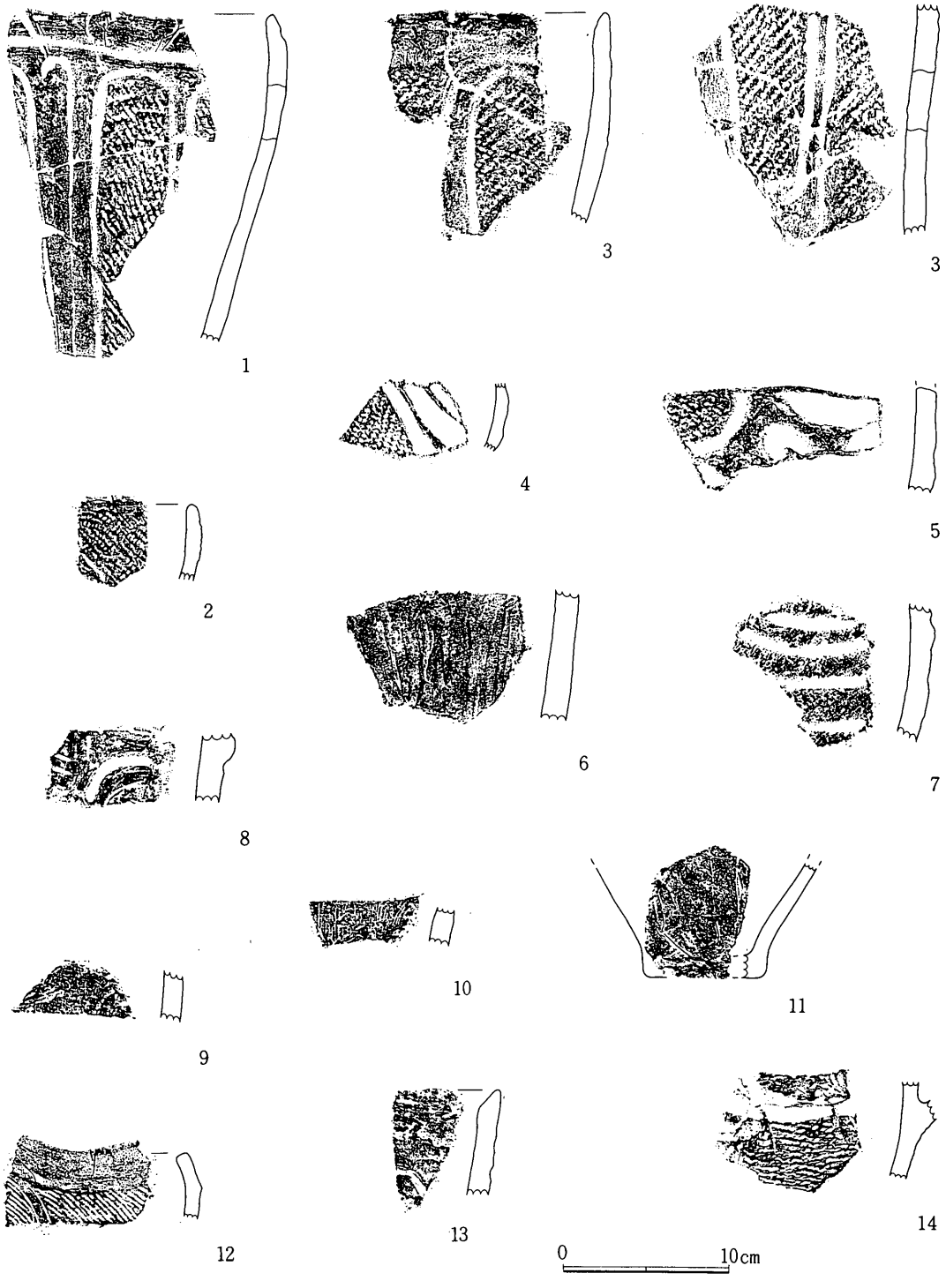


第23図　広畑遺跡出土石器（４：５）

第５表　遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
23	石　鏃	チャート	1.90	1.30	0.28	0.5	D-4出土
24	石　鏃	黒曜石	1.10	0.90	0.23	0.2	D-12出土
25	石　鏃	黒曜石	1.56	0.80	0.25	0.3	D-12出土
26	石　鏃	玄武岩	2.05	(1.66)	0.38	(1.2)	D-12出土
27	ピエス・エスキーユ	黒曜石	3.02	1.97	0.96	4.8	D-2出土
28	敲　石	安山岩	(7.10)	(3.00)	(4.30)	(110)	D-2出土
29	石　鏃	黒曜石	2.39	(1.85)	0.50	(1.4)	M-2出土
30	磨　石	安山岩	7.35	6.40	5.85	390	表採
31	打製石斧	安山岩	(5.50)	(4.65)	(1.26)	(55)	表採

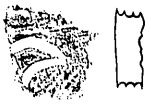
※単位はcm，g



第24図　広畑遺跡出土土器（1：4）

15

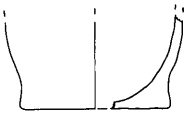
16



17

18

19

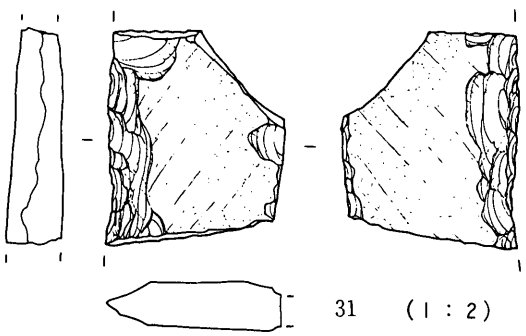


22

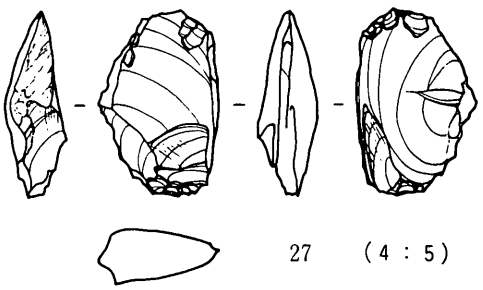
20

21

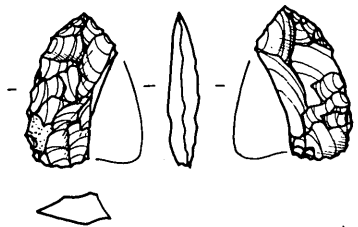
0 10cm



31 (1 : 2)

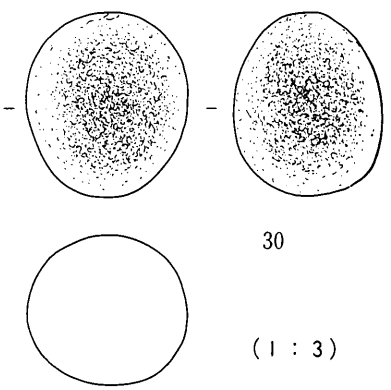


27 (4 : 5)



29 (4 : 5)

28



30

(1 : 3)

第25図　広畑遺跡出土遺物

第6表　土壙出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	部位	器厚	文様 地文(原体)		文様 装飾(原体)		調整	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	深鉢	口縁～胴上		縄文	R	横位沈線文 逆U字沈線文 蕨手文	棒状工具	内面・密 口縁部では横位、胴部では斜位	破粒、白色粒、雲母、赤色スコリア粒	赤褐色	良好	加曽利E3	D－11
2	〃	口縁		〃	LR	逆U字沈線文	〃	内面・密 横位	砂粒、白色粒、雲母	褐色	良	〃	表採
3	〃	胴上		〃	RLR	並行沈線文	〃	内面・密 斜位、横位	砂粒、白色粒、雲母 赤色スコリア粒	〃	〃	〃	〃
4	〃	〃		〃	RL	隆線文	〃	内面・密 横位	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃	〃		〃	RL	〃、沈線文	〃	〃	〃	〃	〃	〃	D－12
6	〃	〃		〃	——	沈線文	〃	内面・密 横位、斜位	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃		——	——	隆線文	〃	〃	砂粒、白色粒、雲母、小石	〃	〃	〃	D－19
8	〃	〃		沈線文	棒状工具	〃	〃	内面・密 方向不明	砂粒、白色粒、小石、(石英)	〃	〃	〃	表採
9	〃	胴下		——	——	沈線文	〃	内面・密 斜位	〃	黒褐色	〃	〃	D－12
10	鉢	〃		条線文	櫛状工具(4本)			内面・密 横位、斜位	砂粒、白色粒、雲母、赤色スコリア粒	黄褐色	〃	〃	表採
11	深鉢	胴下～底		——	——	沈線文	棒状工具	内面・密 縦位、斜位、横位	砂粒、白色粒、雲母	黒褐色	〃	〃	〃
12	〃	口縁(波状)		——	R	微隆起文 沈線文	ヘラ状工具	内面・密、横位、口唇部調整、内外面ともに顕著	砂粒、白色粒、雲母	褐色	〃	加曽利E4	D－2
13	壺	口縁		——	——	逆U字沈線文	棒状工具	内面・密 横位	〃	〃	良好	〃	D－11
14	〃	胴上		縄文	R			内面・密 横位、斜位	砂粒、白色粒、雲母	赤褐色	〃	〃	D－2 把手部欠失
15	〃	把手		——	——	蕨手文	棒状工具	————	〃	褐色	良	加曽利E3～E4	表採
16	深鉢	胴上		縄文	LR	沈線文	〃	内面・密 縦位、斜位	〃	赤褐色	良好	称名寺	D－2
17	〃	〃		〃	〃	〃 (J字)	〃	〃	砂粒、白色粒、雲母、赤色スコリア粒	褐色	良	〃	〃
18	〃	〃 (頸部)		〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	黒褐色	〃	〃	〃
19	〃	胴上		〃	〃	〃	〃	内面・密 横位、斜位	砂粒、白色粒、雲母	褐色	良好	〃	D－11
20	〃	〃		〃	〃			内面・密 縦位、斜位	砂粒、白色粒、雲母、赤色スコリア粒	〃	〃	中期末～後期初	D－12
21	〃	〃		〃	〃				砂粒、白色粒、小石、雲母	黄褐色	良	〃	D－2
22	〃	底部				網代痕		内面・密 斜位	砂粒、白色粒、雲母、 赤色スコリア粒	褐色	〃	後期初	D－2 底径(8.0)

V 総　括

広畑遺跡において検出された遺構は、竪穴住居址1軒・土壙21基・溝状遺構4基・屋外埋甕1基であった。

このうち、21基検出されている土壙は、時期を限定でき得ないものが多かったが、おそらくは大方は縄文時代中期後半から後期初頭に位置付けられるものであろう。また、屋外埋甕1基は称名寺式期に位置付けられるものであった。これらは、遺跡付近に展開したであろう縄文集落に付随する遺構群とみておくことができよう。なお、広畑遺跡の東脇にもみられた豊富な湧水でも示されるように、この標高900m地帯は浅間山麓の湧水ラインであり、こうした好条件が縄文集落を発展させる契機となり得たのであろう。

一方、竪穴住居址は、平安時代の、わけても9世紀第IV四半期に位置付けられるものであった。奈良・平安期にあってこの地域には、延喜式記載の御牧『塩野牧』が展開していたものと思われ、まさにその官牧の直中に存在しているのがこの広畑遺跡なのである。あるいは、この住居に居住した人が牧場経営に係っていたであろうことも推察するに難くない。となると、この住居址から検出された鈴等の装飾品も、官牧の馬の馬具（装飾品）であった可能性も残ろう。

また、4基溝状遺構はその時期を特定できなかったが、このうちM－1とM－4は人工的なものであることも考えられた。あるいは牧の機能の一端を担う、いわゆる『駒留溝』であった可能性も出てくるのである。ちなみに本遺跡の北方向地点には、『塩野牧』遺構といわれている土堤状遺構も残されている（塩野山遺跡）。

以上、広畑遺跡の歴史的性格について考え、総括としておく。

引用参考文献

岡本孝之ほか1977　『当麻遺跡・上依地遺跡』　神奈川県埋蔵文化財調査報告12　神奈川県教育委員会

堤　　隆　　1986　「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐって」（『信濃』38-4）

堤　　隆　　1989　「根岸遺跡の土器様相」（『根岸遺跡』）　御代田町教育委員会

御代田町教育委員会　1986　『大沼遺跡』

御代田町教育委員会　1988　『十二遺跡』

御代田町教育委員会　1989　『根岸遺跡』

本橋恵美子　1986　「土器」（『天祖神社東遺跡』）

付　編　1

液体シンチレーション^{14}C年代測定

京都産業大学　理学部
山田　治

先般来、ご依頼の^{14}C年代測定の結果を下記のとおりご報告申し上げます。

番　号	測定番号	試料名・採取地	測定結果
1	KSU-1760	御代田町　No.5 H－1号住居址　炭化材 （広畑遺跡）	1050　±　25　BP

（註）　^{14}C年代測定値の表現法は、次のごとき国際的約束に基づいています。

(1)　^{14}Cの半減期は5568年として計算します。

(2)　BPはBefore Presentの略です。ただし、Presentは AD1950年に固定し、それから何年前かを示します。

(3)　測定誤差は、1標準偏差を用います。（真の値が1標準偏差の中にはいる確立は約68％です。）

(4)　測定値には必ず測定機関記号と測定番号をつけます。索引やデータの確認に必要ですから、引用の際には必ずこの記号と番号をつけておいて下さい。

(5)　^{14}C年代測定値は世界共通です。そのために、^{14}C濃度の基準には、アメリカ国立標準局から販売されているシュウ酸（通称NBSシュウ酸）を使用しています。

付　編　2

広畑遺跡出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試　料

試料は49点で、平安時代(9世紀)のものとされるH－1住居址より検出されたものである(第1表)。いずれも建築材と考えられている。

(2) 方　法

試料を乾燥させたのち木口・柾目・板目三断面を作成、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(第2・3図)も作成した。

(3) 結　果　(第1図、第1表)

当年枝のため種類不明のもの1点と、樹皮4点を除く44点が以下の4種類(Taxa)に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などはつぎのようなものである。

1) オニグルミ(Juglans ailanthifolia)　クルミ科　A　1点

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～3個が複合、横断面では楕円形、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性III型、1～2細胞幅、1～30細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州まで川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほかに各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり、栄養価に富む。

2) コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種 [Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.]　ブナ科　B　33点

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細

胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（Quercus mongolica）とその変種ミズナラ（Q. mongolica var. grosseserrata）、コナラ（Q. serrata）、ナラガシワ（Q. aliena）、カシワ（Q. dentata）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（Q. acutissima）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

3）クリ（Castanea crenata）　ブナ科　C　8点

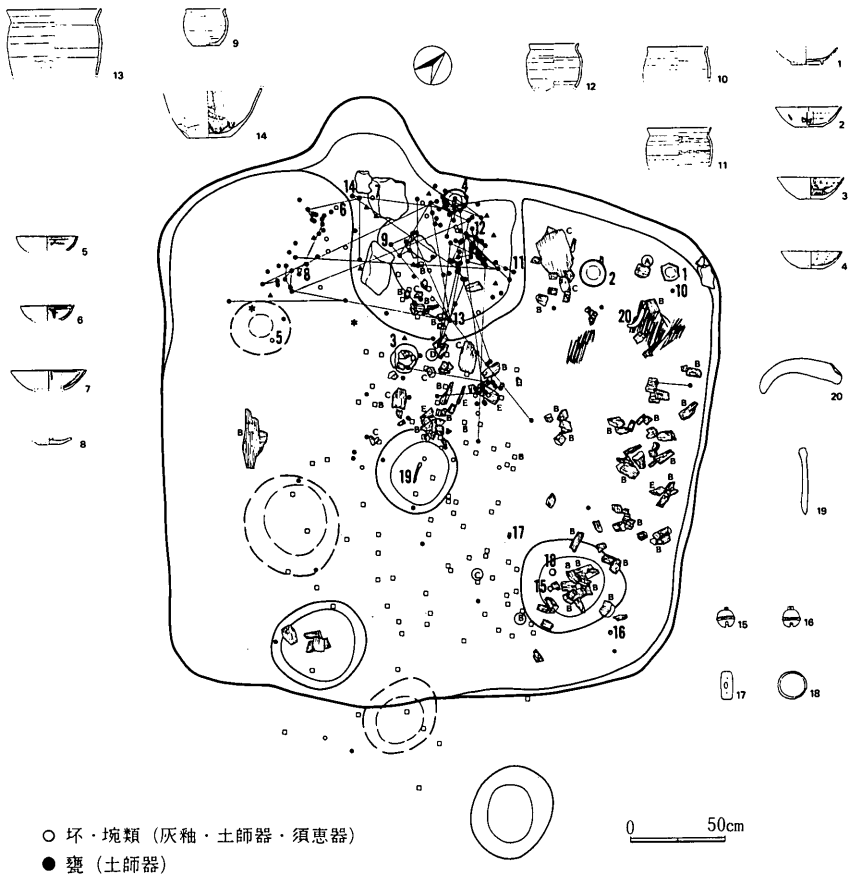
環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椙木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

4）カツラ（Cercidiphyllum japonicum）　カツラ科　D　2点

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。横断面では多角形、階段穿孔を有し、段(bar)数は20～30、放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

カツラは北海道から九州に自生する落葉高木である。カツラ属にはこのほか、本州北中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ(C. magnificum)がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径木が多く、欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる有用材の一つである。



第Ⅰ図　同定炭化材の分布（アルファベットに○は顕微鏡写真サンプル）

第Ⅰ表　広畑遺跡Ｈ－１号住居址出土炭化材の樹種

番　号	種　　名	個体数
A	オニグルミ	1
B	コナラ属（コナラ亜属 コナラ節）の一種	33
C	クリ	8
D	カツラ	2
E	樹皮	4
F	種類不明（当年枝）	1

(4) 考　察

建築材と考えられる同定された試料44点をみると、コナラ節（33点）が圧倒的多数を占め、ほかにクリ（8点）・カツラ（2点）・オニグルミ（1点）が認められた。コナラ節やクリの材は重硬で強度や耐朽性に優れていることから、掘立柱などに用いるには適した樹種といえよう。ただし、コナラ節やクリは一般に炭化しにくいため、残存・検出量が多くなった可能性がある。

一方、本試料より約2世紀前のものとされる十二遺跡H—58号住居址（パリノ・サーヴェイ株式会社　1988a）や、小諸市鋳物師屋遺跡3号住・16号住（パリノ・サーヴェイ株式会社　1988b）からも同様の樹種が認められている。これらの樹種は建築材などとして普通に用いられていたのであろう。

ところで、本住居址と同時期のものとされる根岸遺跡H—11住居址では、クヌギ節が多く認められている(パリノ・サーヴェイ株式会社　1989)。上記のように、コナラ節とクヌギ節ではクヌギ節のほうが炭材としてより優れている。ここで多数のコナラ節が認められる一方でクヌギ節が全く認められないのは、クヌギ節が全くあるいはほとんど使われていなかったためであろう。このように住居ごとに使用樹種に違いが認められる理由は明らかではないが、同様の事例は、時代・地域とも離れるが、群馬県渋川市中筋遺跡の6世紀前半とされる火山噴火被災住居址の間でも認められている（高橋　1988)。

このように、同時期・同地域あるいは同一遺跡内にあっても住居ごとに異なった樹種を選んで使用している可能性がある。したがって、残存・検出される少量の炭化材の同定結果から、直ちに当時の使用樹種の全体像を把握することは困難であろう。

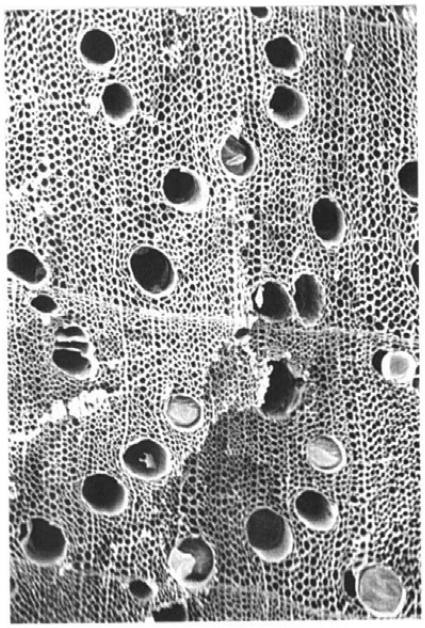
引用参考文献

パリノ・サーヴェイ株式会社　1988a「十二遺跡出土炭化材の樹種同定」(『鋳師屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—』)　御代田町教育委員会，393—399.

パリノ・サーヴェイ株式会社　1988b「鋳物師屋遺跡出土炭化材同定」(『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第11集　鋳師屋遺跡群鋳物師屋　—長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書—』)　小諸市教育委員会，116—117.

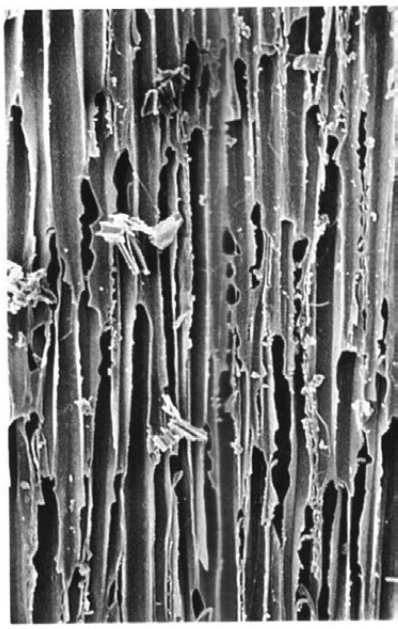
パリノ・サーヴェイ株式会社　1989　「根岸遺跡出土炭化材の樹種同定」(『鋳師屋遺跡群根岸遺跡—長野県北佐久郡御代田町根岸遺跡発掘調査報告書—』)　御代田町教育委員会，291—296.

高橋　利彦　1988　「中筋遺跡出土炭化材の樹種」(『渋川市発掘調査報告書第18集　中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書』)　群馬県渋川市教育委員会，42—47.



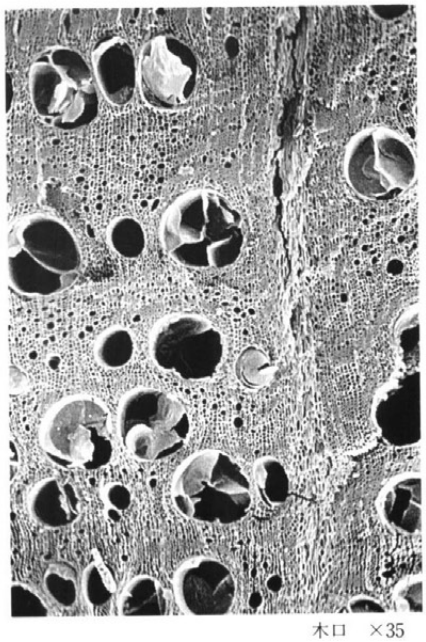
木口　×35

柾目　×140

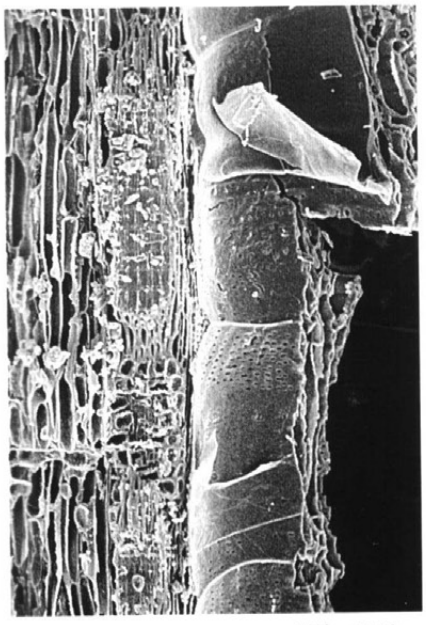


板目　×140

Juglans ailanthifolia　　A　オニグルミ



木口　×35

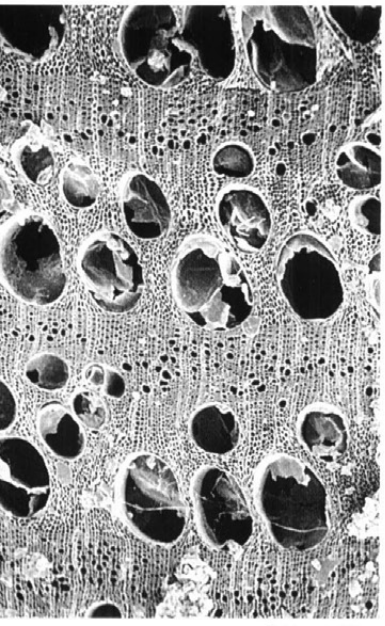


柾目　×140

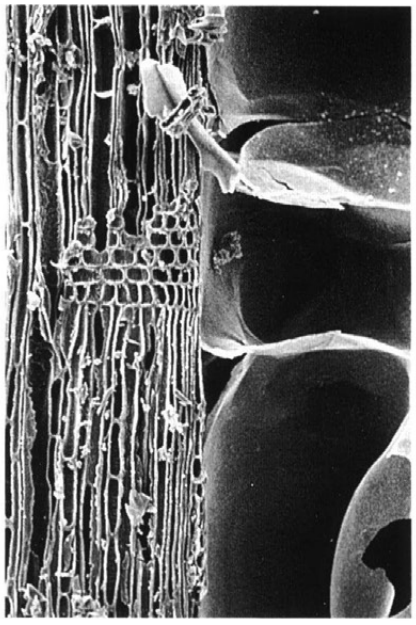
板目　×140

Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. prinus) sp.　　B　コナラ節

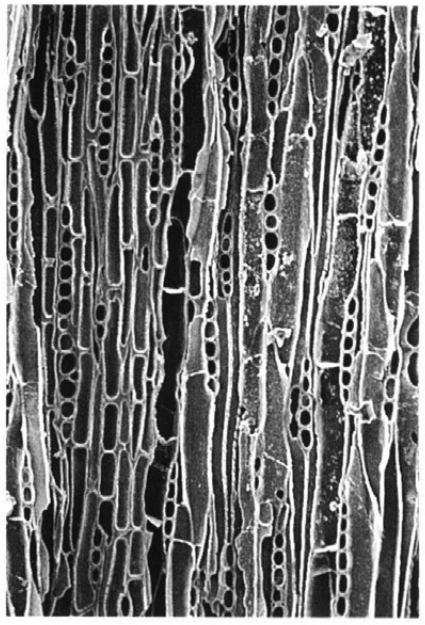
第２図　Ｈ－Ｉ号住居址炭化材の顕微鏡写真



木口　×35

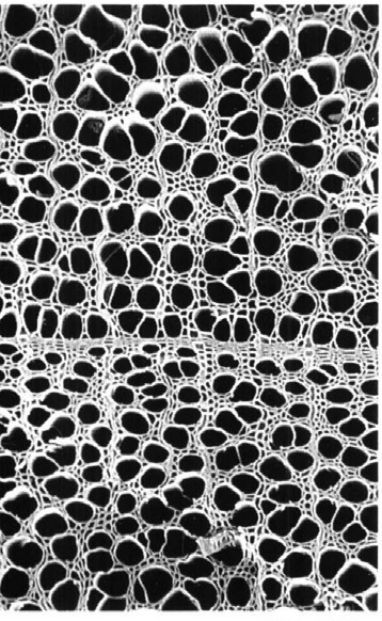


柾目　×140

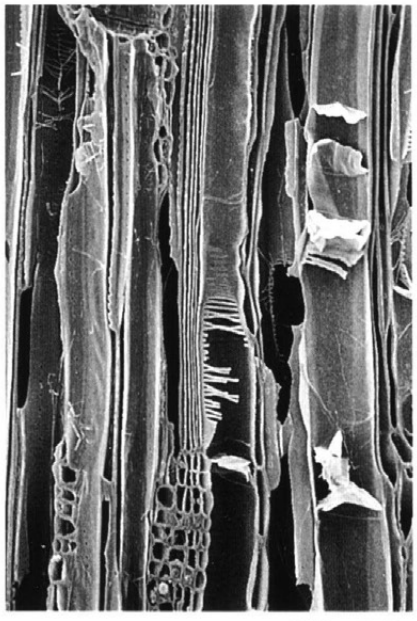


板目　×140

Castanea　crenata　　C　クリ



木口　×70



柾目　×140

板目　×140

Cercidiphyllum　japonicum　　D　カツラ

第３図　Ｈ－Ｉ号住居址炭化材の顕微鏡写真

図　　版

図版1　広畑遺跡の航空写真

H－1号住居址

H－1号住居址堀り方

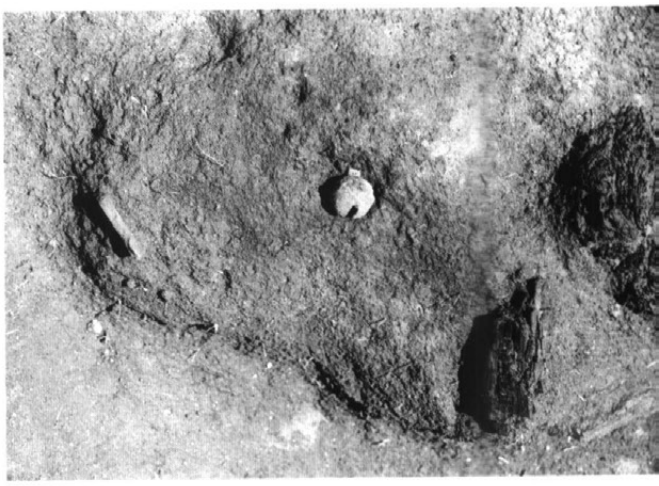
H－1号住居址カマド

H－1号住居址カマド掘り方

H－1号住居址遺物出土状態

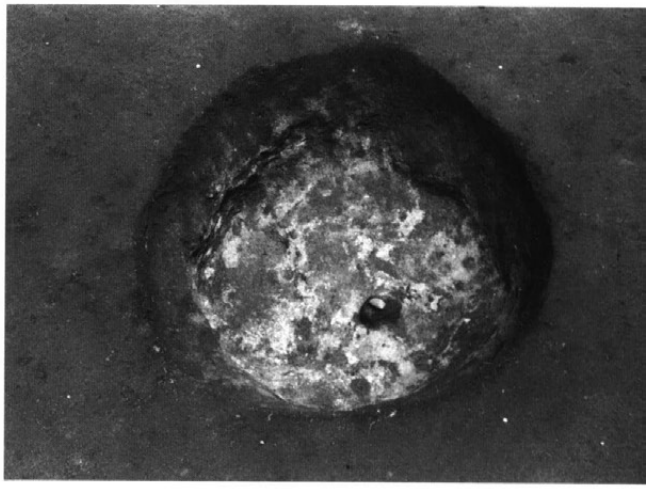
H－1号住居址遺物出土状態

H－1号住居址遺物出土状態



H－1号住居址遺物出土状態

D－1号土壙

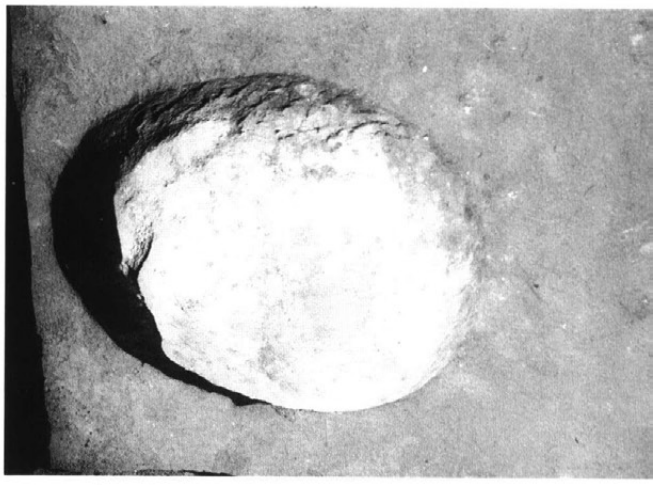


D－2号土壙

D－3号土壙

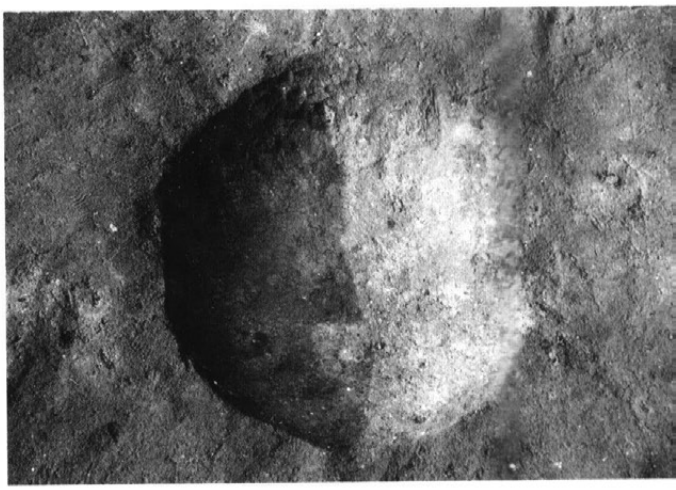
D－4号土壙

D－5号土壙



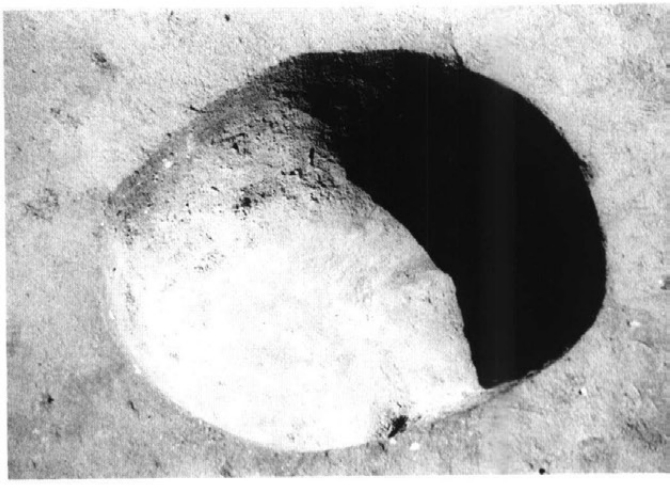
D－6号土壙

D－7号土壙



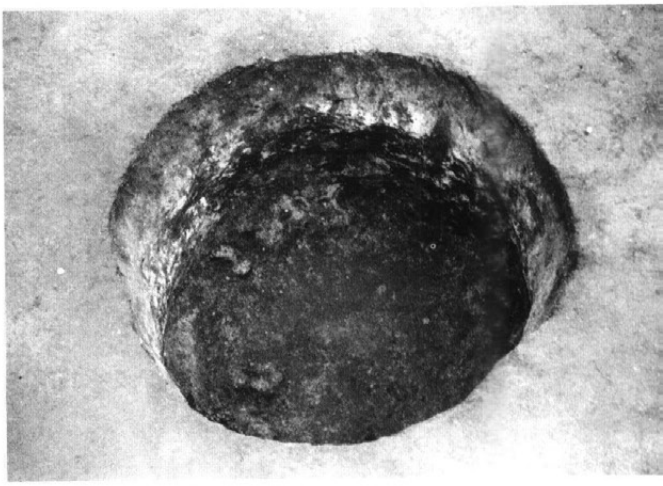
D－8号土壙

D－9号土壙

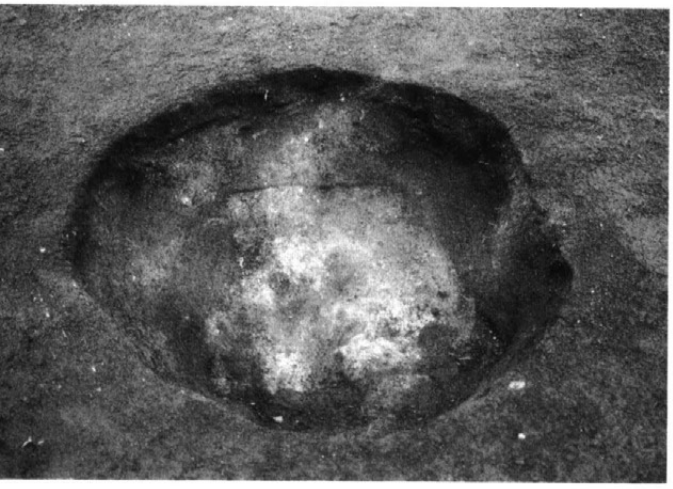


D－10号土壙

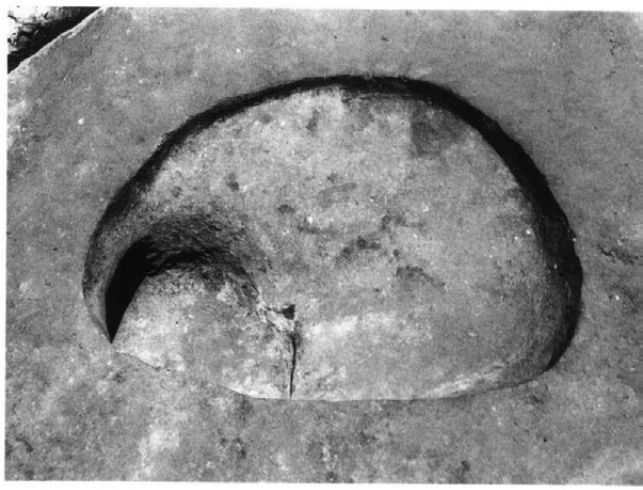
D－11号土壙



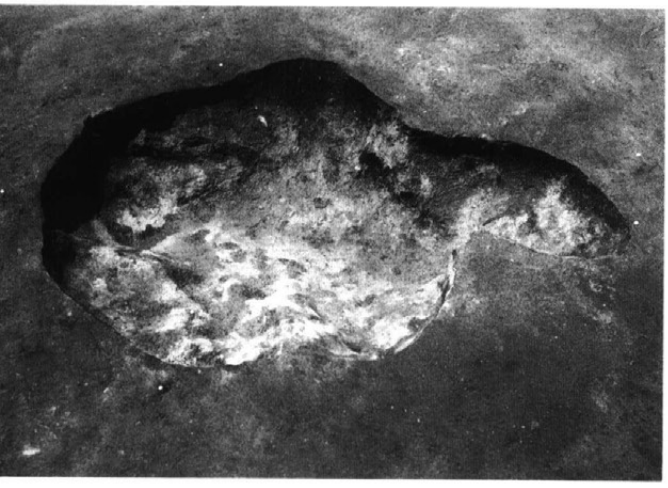
D－12号土壙



D－13号土壙

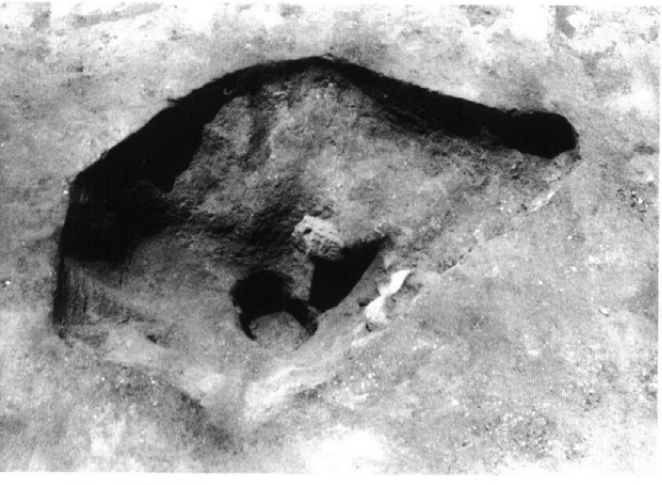


D－14号土壙



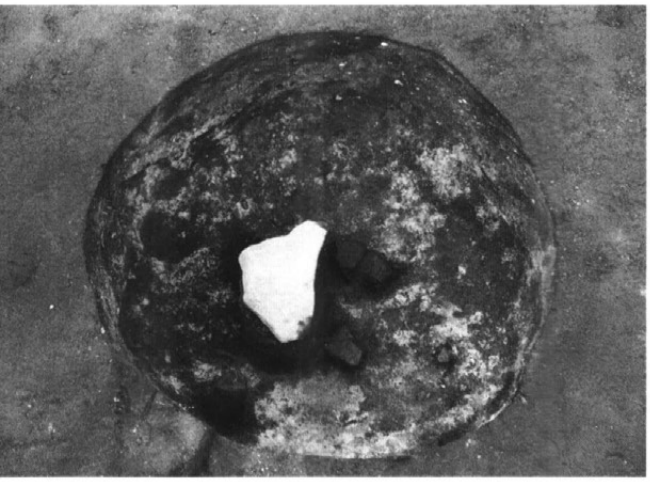
D－15号土壙

D－16号土壙

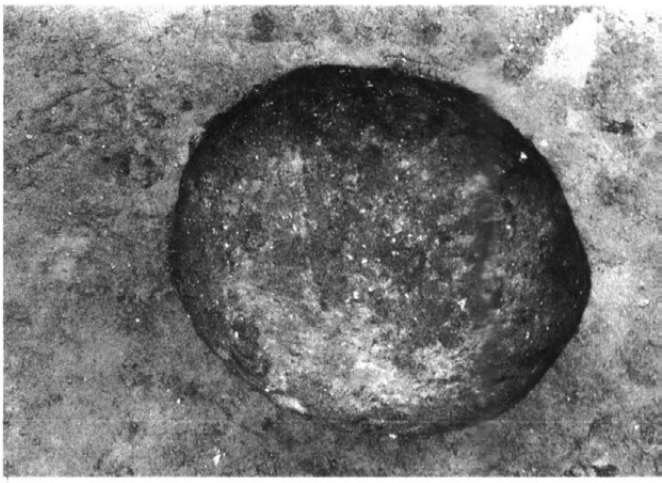


D－17号土壙

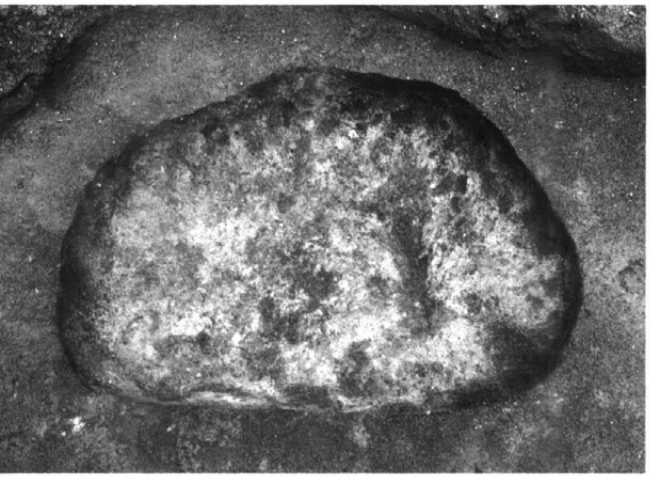
D－18号土壙



D－19号土壙



D－20号土壙



D－21号土壙

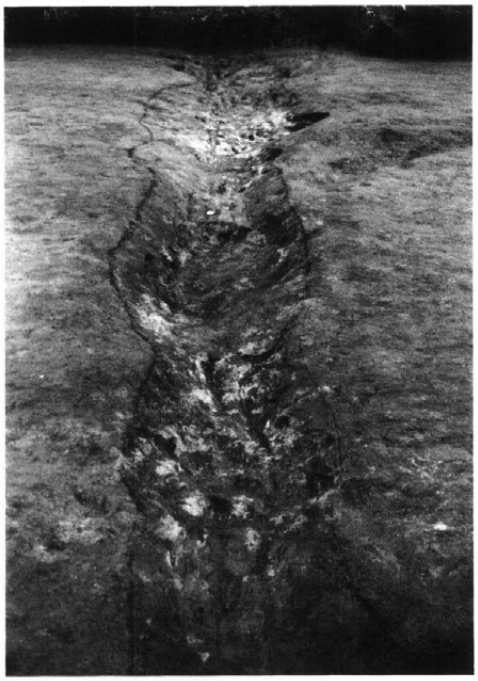
D－２号土壙調査風景

U－１号埋甕

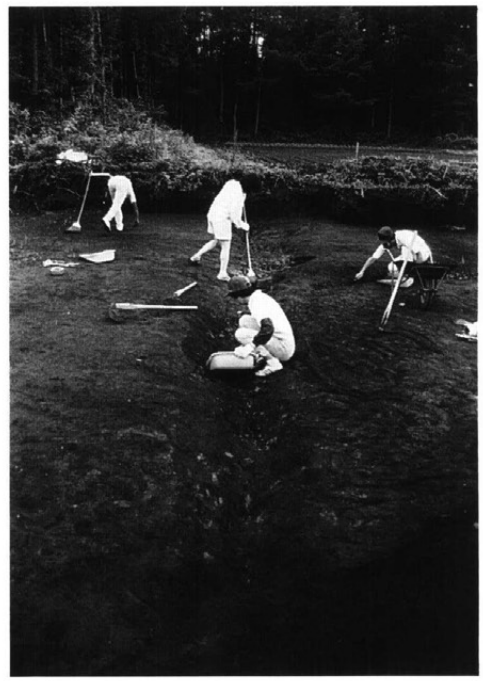
U－１号埋甕の断面

M— 1 号溝状遺構

M— 2 号溝状遺構



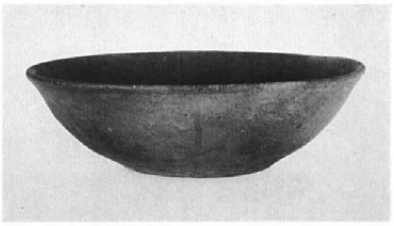
M— 3 号溝状遺構



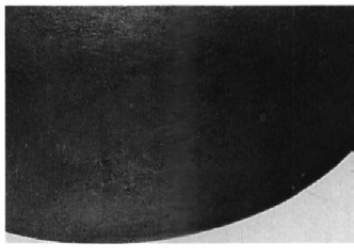
M— 3 号溝状遺構調査風景

M— 4 号溝状遺構

H－1・1



H－1・2



H－1・2 墨書「⋈ ○」

H－1・3

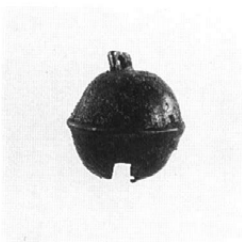
H－1・4

H－1・9

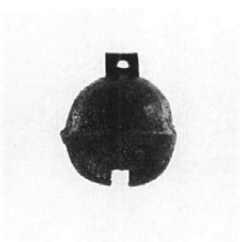
H－1・10

H－1・13

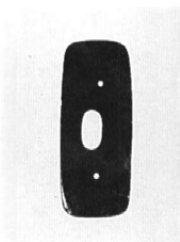
H－1・11



H－1・15

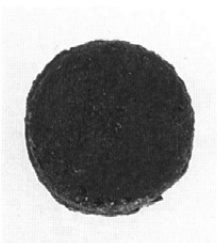


H－1・16



H－1・17

H－1・12 （1：3）



H－1・18
（4：5）

H－1・19

H－1・20（1：3）

図版　9

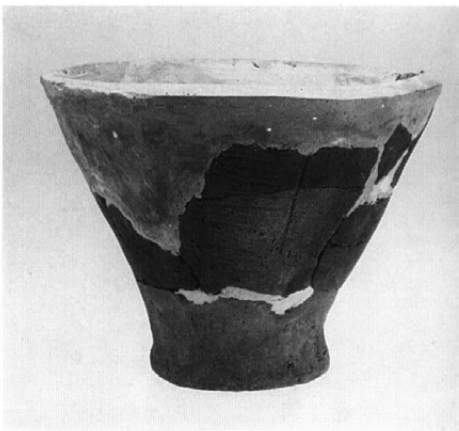
H－1号住居址出土遺物

U－1号埋甕（小川忠博氏撮影）（1：4）

内堀高治氏所蔵の土器（1：4）
（小川忠博氏撮影）

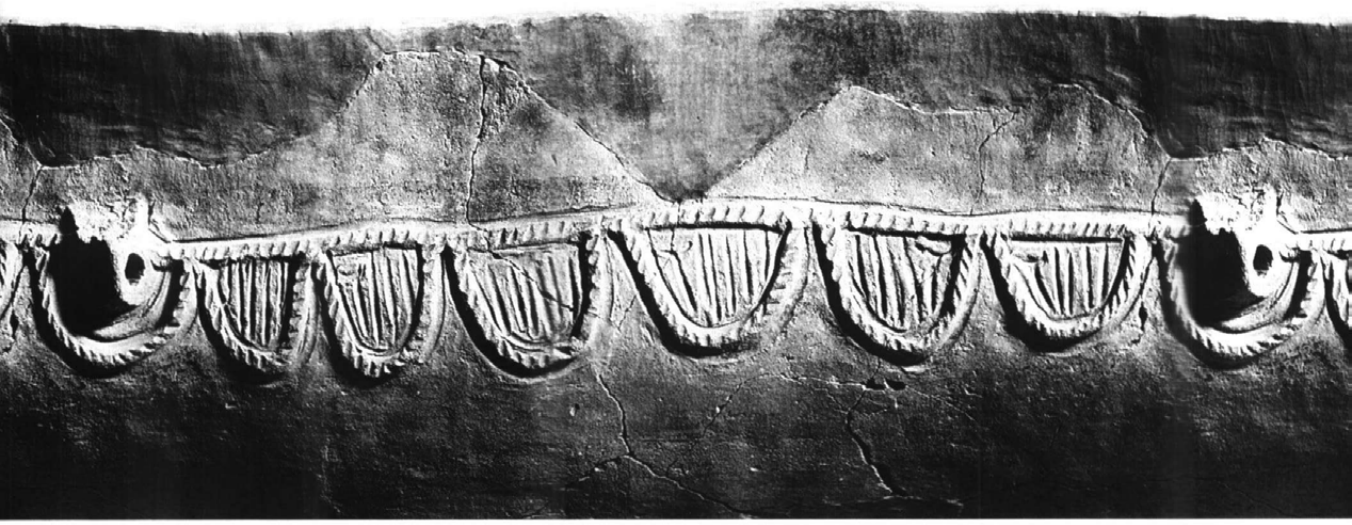
内堀典浩氏寄贈の土器（小川忠博氏撮影）

（1：4）

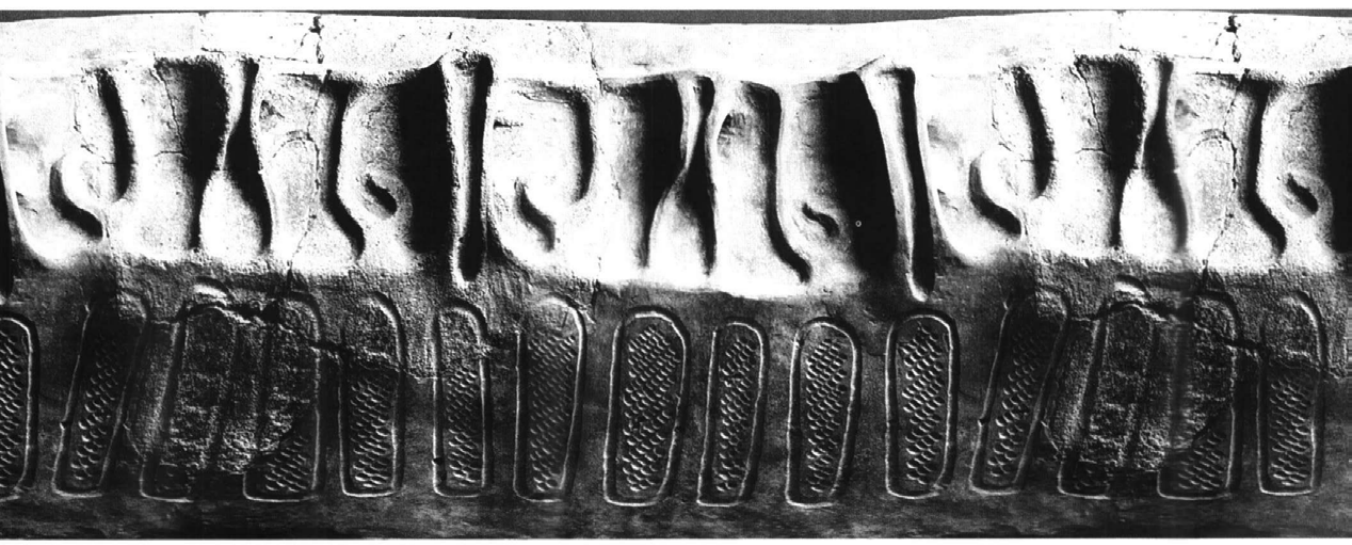


地区外出土の土器（1：4）

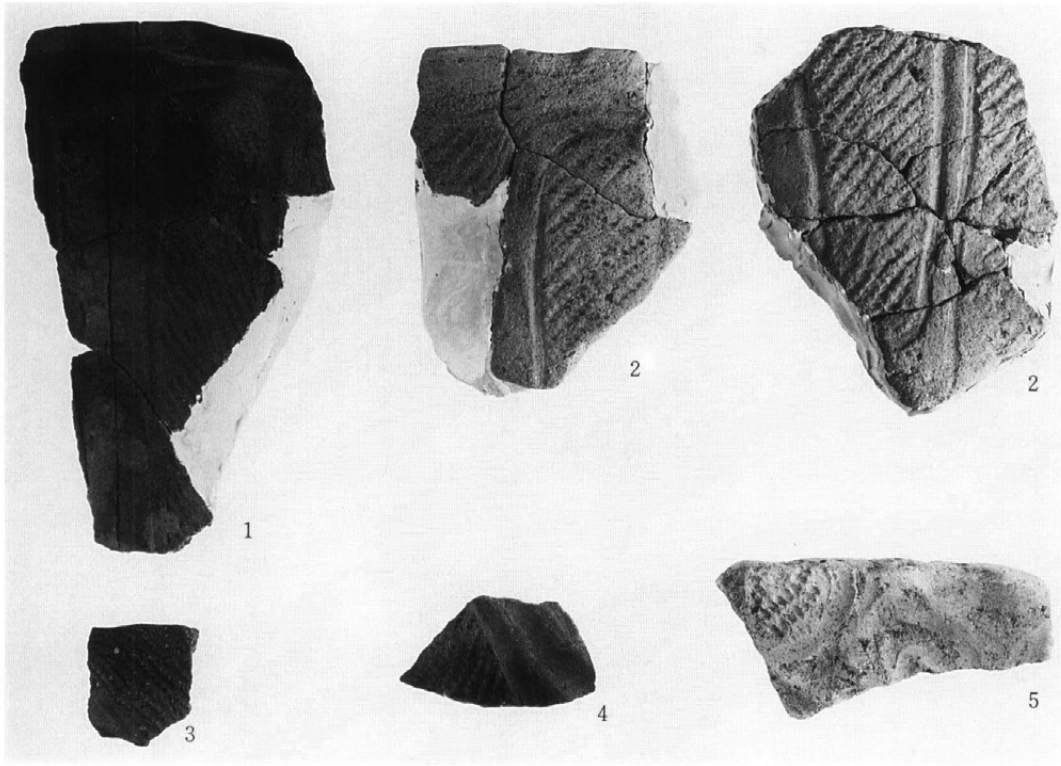
U－1号埋甕の展開写真　（小川忠博氏　撮影）



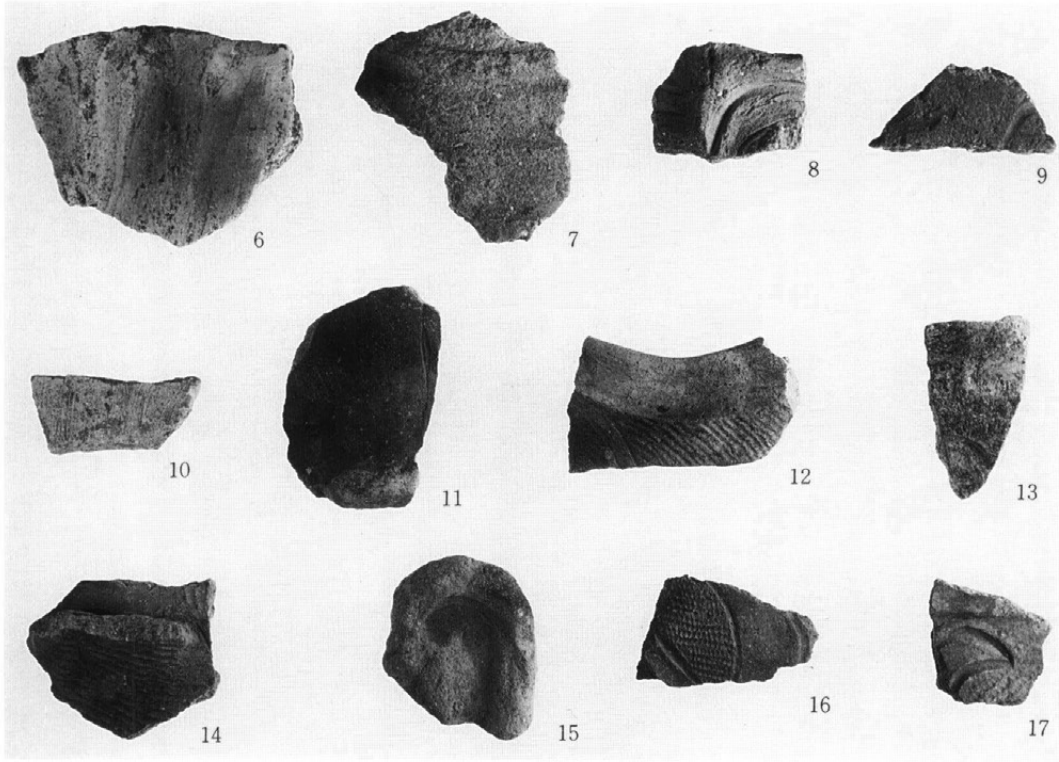
内堀高治氏所蔵土器の展開写真　（小川忠博氏　撮影）



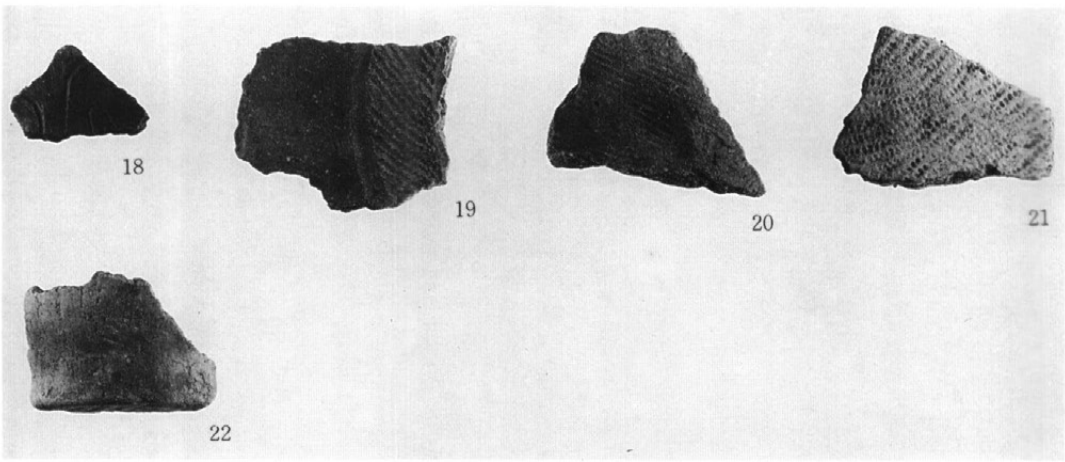
内堀典浩氏寄贈土器の展開写真　（小川忠博氏　撮影）



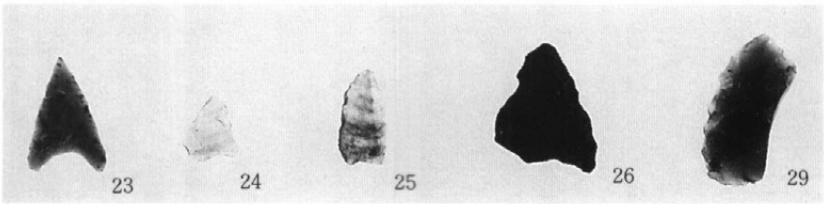
広畑遺跡出土縄文土器　（1：3）



広畑遺跡出土縄文土器　（1：3）

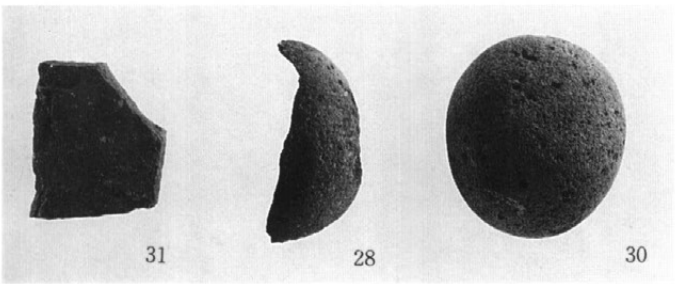


広畑遺跡出土縄文土器　（1：3）



広畑遺跡出土石器　（4：5）

（4：5）



広畑遺跡出土石器　（1：3）

御代田町の埋蔵文化財調査報告書

第1集　1975　『馬瀬口下原古墳群』
第2集　1985　『野火付遺跡』
第3集　1985　『宮平遺跡』　—遺構編—
第4集　1986　『大沼遺跡』
第5集　1987　『前田遺跡』
第6集　1988　『十二遺跡』
第7集　1989　『根岸遺跡』
第8集　1989　『広畑遺跡』

※　この本には、中性紙（本文エミネ90kg・図版コート110kg）を使用してあります。

広畑遺跡

—長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書—

1989年3月25日　発行

編　集　御代田町教育委員会
発　行　御代田町教育委員会
印　刷　ほおずき書籍株式会社